



教職大学院 Newsletter

No. 163

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2022.11.2(公開版)

教職員の研修と働き方改革の両立をめざして

東京都板橋区教育支援センター 所長 阿部 雄司

この度、福井大学大学院ニュースレターにおいて巻頭言での貴重な機会を頂き感謝申し上げます。平成26年より板橋区は福井大学教職大学院と協定を結びましたが、協定締結以前の平成23年より計6名の区内中学校教員や指導主事を大学院生として派遣し、教科センター方式を採用している区内中学校を中心に広く研究の成果を還元することができました。また校内研修会等においては、教科指導にとどまらず、教育上の諸課題に関して御指導頂き、現在におきましても、その精神は脈々と生きつづけており、交流を続けているところです。今後本区においては、教科センター方式の学校の増設を予定しています。これから福井大学大学院との連携を一層強化し、福井大学とともに本区の発展に努めていければと考えております。

板橋区教育支援センターにおきましても、福井大学大学院の東京サテライトのカンファレンスの場として研修室を提供し、週末や長期休業期間において関東各都県だけでなく、遠くは新潟県や富山県、沖縄県の離島の教職員の方々の学びの場として御活用いただいております。

ここ数年におけるコロナ禍を経験した教育現場の変化はソフト面、ハード面ともに大変大きく、教員の研修の在り方も大きく変わろうとしていると日々感じております。板橋区教育支援センターが主催する研修もオンラインで開催するものを意識的に増やし

ており、感染状況に左右されない研修、そして現場の先生方の負担にならない研修の在り方を追求している最中であります。板橋区と福井大学は地理的な距離では決して近いとは言えないでしょうが、これまでの交流の礎を活かしながら、東京サテライトを拠点とし、更に多くの先生方の学びの場となることを願っております。

板橋区教育支援センターでは毎月「板橋アカデミー」という教員の学びの場を企画運営しております。毎月登壇される講師の先生方は教育現場の最前線の研究をされている方々であります。平日の勤務時間終了後の自主的な研修として設定していますが、毎回100名を超える参加者が集っております。今月も10月14日に福井大学教職大学院の福島教授をお招きし「教員間・学校間の学び合いと学力向上」について御講義頂きます。板橋区の多くの教職員の学びの機会をいただけることに感謝しております。

内容

巻頭言	(1)
インターンシップ/週間カンファレンス報告	(2)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(7)
夏期集中講座報告	(14)
宮古島ラウンドテーブル振り返り	(23)
NITS 研修振り返り	(25)
研究会情報等	(27)

さらには本年度 7 月に教員免許更新制度が廃止になり、それに替わるものとして、今後教員の研修の履歴を学校管理職が管理していくことが求められています。教職員の新しい研修の在り方や、時代の変化に対応できる教職員のリスクリングをいかに効果的

かつ効率的に行い、更に教員の働き方改革を両立できるか、今後の新たな取り組みを福井大学教職大学院と共同し、実現していきたいと考えております。



インターンシップ・週間カンファレンス報告

他者を見て自分を振り返る、そして迷う日々

授業研究・教職専門性開発コース 1 年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

大畑 颯人

4 月から大学院に入学し、慌ただしく半年が過ぎた。私は高校時に「高校の理科教師になりたい」と思って教育学部を志し、教員採用試験も中高理科として試験を受けた。しかし、この 4 月からのインターンシップ先は“小学校”。非常勤講師を兼ねる形であるため、すぐに授業が始まるが、大学時代には中学校や高校の単元の教材研究ばかりで、まず「小学校の授業ってどんなかんじだった？」という暗闇の中から新生活がスタートした。

夏休みを迎えるまでは、正直授業についての手ごたえを感じられなかった。学部時代の教育実習の際に聞いた「授業は教材研究で 9 割決まる」という言葉を信じながら教材研究を行うが、実際は、授業の雰囲気（話を聞く姿勢など）が作り出せなかったり、自分の発する問いや発言が難しかったり、目の前でけんかが勃発したりと、教材より前に目の前で目まぐるしく変化する子どもたちの姿に対応するのに精一杯だったのだと思う。時には「なんで自分が小学校に…？」と思うこともあった。

その中でも、教頭先生の言葉に支えられ、前を向くことができた。「高校よりも中学校、中学校よりも小学校の先生のほうが“子どもを見る力”があると思う。けど“子どもを見る力”は中学校でも高校でもおろそかにできない大切な力だから今年 1 年その力をつけていきな」。インターン開始時に、自分が中学校・高校の教員を目指していることを理解していただいて、教頭先生も理科教員として高校→中学校→小学校と移られた経験からいただいた言葉だった。あわただしく、先が見えない状況から、「“子どもを見る力”をつけたい」という目標が生まれた。しかし、前向きにはなれたものの夏休み前までは目の前の授業に向き合うことで精一杯であった。実践はたくさん積みまれていくが、省察が十分に行われていないということを実感していた。

学校が夏休みに入ると、今年から現場で働いている学部時代の友人と会う機会があった。そこでは前期に溜め込んだ悩みをみんなで発散する場となった。小規模校で担任をしているが指導ができず少し落ち

着きのないクラスになってしまった、という自分の悩みと近い悩みを抱えている友人もいた。自分の院生としての生活も話題に上がり、“授業を見られること”の良さを再認識させられた。今年から現場に出た同僚たちも自分の授業をより良くするために試行錯誤はしているが、他の先生の授業を見る時間がなく、インターンとして、毎日他の先生の授業、自分が講師として持っているクラスの他の授業の子どもたちの姿を見られるのは本当に羨ましいということだった。自分の「講師兼インターン」という立場の強みが見えてきて、夏休み後からは、授業見学で感じたことを自分の授業に積極的に生かしていこうと感じるようになった。

学校が夏休みを終えると、学部3年生の教育実習が始まった。自分は、中学校での主免実習であったため、小学校での実習は自分のクラスにずっと付くなど新鮮な部分が多かった。実習生が指導されている姿を見ながら、自分の授業について見つめ直すきっかけとなったように思う。前述したように夏休みを迎える前までは、とにかく内容を終わらせることに必死になっていて授業の組み立てなどが上手くいかなかった部分が多かった。実習生の授業を見てみると、まるで自分の授業を鏡に映したようで、自分の授業に対する課題が浮き彫りになっていった。今は、実習で明らかとなった課題について、授業実践を通して改善を図っている。

教職大学院での様々なプラス要素が見えてきたと同時に、様々な迷いも多く生まれている。1つ目が、授業を見るとき視点である。先に授業を見ることについてのメリットなどを述べてきたが、多くの授業を見ていく中で、自分が授業でどこを見るべきなのか混乱してきた。私は、金曜カンファレンスにおいて「授業研究」（木村優・岸野麻衣 編）を検討したころから、見たときに授業の情景を思い出せるような記録を取ろうと意識してきたが、最近は記録を取っているうちに、子どもたちの学びの姿を見逃すことがよくあり、本当にこの記録の取り方は良いのかと迷うようになった。2つ目が、“探究学習”とはどのような学びなのかについてである。私は、学部3年時の教育実習において、指導教官の方針から、探究的な授業の実践を行った。学部時代の授業においても探究的な学びができるような授業づくりということを中心に、既存知識が子どもたちの中でつながっていくような授業を考えてきた。しかし今、私がいる小学校では、その既存知識の多くが、子どもたちの素朴な概念であり、それを授業に生かしていく難しさに苦戦している。また、そもそもどんな授業が探究なのだろう？と、自分自身の“探究学習”の考えについても、現在再構成されているような感じがする。

これからのインターンにおいても、様々な場面から自分の実践を見つめ直し、多くの迷いに向き合って、得られるものが多いインターンにしていきたい。

語り合いで得た学び

—参観者と授業者の視点から授業を見る—

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

松浦 妃南

大学院に進学して約半年が過ぎ、教員採用試験に主免教育実習の手伝いなど怒涛の日々を過ごしてきた。インターン校での生活にもだいぶ慣れ、生徒との

関係もだんだんと築くことができていると実感している。長期インターンシップでは、前期は授業を見ることを中心に取り組んできた。また、授業をさせてい

ただ機会もあった。どれも貴重な経験で、自分の学びになるようにと奮闘してきた。長期インターンシップでの学びは、主に金曜カンファレンスで共有することとなっている。そこでは、自分自身の葛藤や悩みをM2・M3の先輩や先生方に聞いていただき、たくさんのアドバイスを頂くことができている。このような有り難い環境にいる中での学びの充実を実感するとともに、学校現場でも同じようなコミュニティがあればいいと願う日々である。今回は、そんな前期のインターンシップでの学びを書き記していこうと思う。

まず“授業を見る”ということについてである。学部時代を含め、これまで多くの授業を参観させていただいた。その中で自分自身が意識していたのは、教師の動きや支援ではなく子どもの姿に着目しようということであった。授業は子どもありきであり、子どもたちが持つ疑問や興味に基づいて授業をデザインしていくことの重要性を理解していたつもりだったからである。ところが、5月下旬頃、その意識は表面上だけになっているのではないかというように悩む時期が来た。「子どもの姿をみよう」と心掛けてきたが、本当に見ることができているのか分からなくなった」という悩みを金曜カンファレンスで打ち明けたところ、授業を見る際の視点や授業記録の取り方、授業を見るとき立ち位置など、そもそも“授業を見る”とはどういうことなのかということについて考えることが大事だということを教えて頂いた。これまで、「子どもを見る」ということは意識して授業を見てきたが、どのように見取るのかという方法や視点については深く考えていなかったことに気付かされた。そこから、私は授業を見る際の立ち位置を教室の後ろで見ていたのを前から見てみたり、真ん中で見てみたりと色々試してみた。すると、後ろでは見えなかった子どもの表情や手の動きなどがより見えるようになった。そして、その行動や表情の変化と授業の流れや教師の発問を照らし合わせて自分自身が見取ったことを解釈することを意識するようになった。こ

のように、最初は“授業を見る”こと自体理解していなかったが、今は少しずつ授業の見方をつかめてきたように感じる。少なくとも5月下旬の時点よりかは、自信をもって「子どもの姿を見取ることができている」と言える。今後も“授業を見る”ことはどういうことかについて追及しながら、授業を参観させていただこうと思う。

また、“授業を見る”ことについて深く考えていた時期に、授業をさせていただくことがあった。そこでは、授業をする中で子どもを見取ることの難しさを学んだ。授業を参観する立場では見えていたことが、授業者の立場に立つと一気に見えなくなったのである。そこで、参観者と授業について語り合う場の大切さに気付いた。授業者が見取れなかった子どもの見取りを参観者から聞くことで次の授業において子どもの学びにつなげることができる。このような授業研究の在り方を知れたのは、学校現場とかかわりながら学べる教職大学院ならではの学びである。また、自分自身が授業者の立場においても子どもの学びを見取ることができるようになるにはどうしたらよいのかについては模索していく必要がある。後期では、授業者がどのような視点で授業をデザインし、授業に臨んでいるのかに着目して学んでいきたいと考える。

ここまで、参観者として見る授業と授業者として見る授業の2つの視点から自分の学びを省察してきた。金曜カンファレンスの2の時間では、「評価」をテーマに、今求められている教育や身に付けるべき力について様々な資料を検討しながら議論を重ねている。このように、自分自身のインターンシップでの学びと関連付けながら理論的な内容について語り合うことは、私の中にある「先生像」「学校像」「教育像」を今一度考え直す機会へとつながっている。少し立ち止まって考える時間のある今、当たり前のように捉えているものを改めて問い直し、自分の言葉で話すことができるように、同期や先輩、先生方との語り合いを大切にこれからも学び続けていきたい。

授業実践を通して

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市中藤小学校

川畑 優希

今年度のインターンシップが始まってあっという間に前期が終了した。今年度は、特別支援学級という新たな環境でインターンシップをさせていただいており、学年も特性も多様な子どもたちと充実した日々を過ごしている。昨年度は、通常学級に在籍する気かりな子どもたちと主に係わっていたが、今年度は特別支援学級で国語や道徳の授業実践をさせていただいている。その中で印象に残った授業実践について書き綴りながら振り返っていきたいと思う。

国語の授業実践では、先生方にたくさんのご助言をいただきながら子どもたちが語彙力を高められる学習を目指して行っている。初めて国語の授業実践をさせていただくときに、学年も特性も様々な子どもたちにどのようなアプローチをすればよいのか全く分からなかった。授業実践の前に先生方の授業をみさせていただくと、視覚支援を行ったり、子どもの発言を生かしてまとめたり様々な工夫がなされていた。先生方の授業から同じ題材でも、子どもたち一人一人のゴールは違い、それぞれの支援も違うということを学んだ。これらを意識しながら、『ことばあそび』や『かるたを作ろう』という2つの実践を行った。初めての授業実践『ことばあそび』では、あることば(名詞)の中に別の意味のことば(名詞)が隠れていることに気づき日本語のおもしろさを味わい、子どもたちがクイズを作って出し合うという活動を行った。理解している子どもたちはすらすらとクイズを作っていたが、何をすればよいかわからない子どももいた。しかし、私はそのような子どもに合った支援ができなかった。授業後、先生方から「理解するのが難しい子どものために、いくつかのことば(名詞)をイラスト付きで黒板に提示しておくことで選んで書くことができたかもしれない」「絵を描くことが得意な子どもは、進んで取り組めるが、絵を描くことが苦手な子どもには、タブレットで調べさせると良

いのではないか」というご助言をいただいた。視覚的な情報は子どもたちにとって非常に有効だということ、タブレットを用いることも一つの支援方法であることに気づき、次の授業実践で生かせるよう心掛けた。2つ目の授業実践『かるたを作ろう』では、1つ目の実践の反省を生かして、子どもたち一人一人のゴールを明確にした。かるたの特徴を勉強した後かるた作りを行ったが、読み札を作ることに苦戦している子どもたちが多く見られたので、途中で文節を並び替える学習を行うことにした。ある男子児童は学習前、読み札に「くじゃく」と単語でしか書いていなかったが、学習後はタブレットでくじゃくの写真を検索し、「くじゃくが羽を広げている」とくじゃくの様子を読み札に書き足していた。文節を並び替える学習を入れたことで、読み札をどのように書けばよいのか理解することができたのだろう。はじめは考えていなかった活動だったが、子どもたちの様子を見て臨機応変に授業の進め方を改めていくことの大切さを学んだ。くじゃくの読み札を書いた男子児童は、くじゃくの写真がとても気に入ったようで、長い間それを眺めていた。その姿をみて、私は絵を描くことが苦手な子どもかもしれないと思ったので、次の授業のときに4枚のくじゃくの写真やイラストを印刷して持っていくことにした。男子児童の様子を見て、男子児童が自分で絵を描きそうだったらそれらは提示しないでおうと考えていた。しかし、男子児童は変わらず、くじゃくの写真を眺めているだけだったので、「どのくじゃくがいい？」と写真やイラストを提示すると、嬉しそうにそれらを手に取った。4枚のうち気に入った1枚のくじゃくのイラストを羽が切れないように丁寧にハサミで切っていた。切ったくじゃくは、取り札には収まらなかったもので、「おさまるように切る？」と聞くと「このままがいい」と言ってはみ出して貼っていた。それも男子

児童の個性であり、とても素敵なくじやくのかるた
だと思った。子どもたちは、出来上がったかるたを用
いてかるた大会を行った。かるた大会のルール決め
は完全に子どもたちに任せることにし、子どもたち
は納得したルールのもと楽しそうにかるた大会を行
っていた。

道徳の授業実践では、『よりみち』という題材でき
まりについて学習した。大学院の先生方にも授業を
みていただき、たくさんのご助言をいただいた。授業
を終えて、発問の精選の重要性や視覚支援の有効性、
子どもの発言に対する対応について学ぶことができ
た。発問については少なく、子どもたちの発言を広げ
ていくことが大切であることがわかった。そのため
には、授業中の子どもたちのつぶやきに耳を傾けて
いくが必要になる。また、言葉だけのやり取り

では理解が難しい子どもたちでも、視覚支援によっ
て状況を理解することができると考える。写真を提
示したり、チョークで色分けしたり、様々な工夫をす
ることが大切だと分かった。授業では、子どもたちか
ら予想外の発言があがり私自身考えさせられること
が多かった。子どもたちの意見をしっかり聞き、受け
止めることで、子どもたちが安心して発言できる場
を作っていくことができる。

これらの授業実践を通して、学年や特性が多様な
子どもたちであっても共通して楽しく学習できる題
材や支援方法を探っていきたいと思った。授業をさ
せていただくことで改めて教材研究の奥深さを感じ
るとともに、たくさんの課題を見つけることができ
たので今後の実践に生かしていきたい。

「対話」が生まれる組織・集団づくり Part2

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

河野 茅乃

昨年発行された Newsletter No. 153 で、「『対話』
が生まれる組織・集団づくり」と題し、インターンシ
ップ・週間カンファレンス報告をさせていただいた。
本稿は、その文脈を繋ぎ構想する。

No. 153 では、昨年のインターンシップ先である中
藤小学校で学ばせていただいた「対話の素地」に関し
て、対話は授業だけや学級経営だけで簡潔するもの
ではなく、この2つの両輪がまわることで育成して
いけると痛感したこと、また、対話には発言はせず
「聴く」という参加の仕方もあるという、自身の対話
に関しての考え方が変わったこと等を書かせていた
だいた。聴くことで参加をした子は、聴いたからには
それに対する応答責任がある。それが「話す」ことに
繋がるということだった。そして、教師は児童同士の
意見をつなぐファシリテートとして対話に参加する
のである。この号を執筆した時には、現場に出てから、

まずは聴き合い、認め合えるような学級作りを意識
していきたいと思っていた。

今年はインターンシップ先が変わり、1年を通して、
3つのクラスで授業実践をする機会をいただけるこ
とになった。「聴き合い、認め合えるような学級作り」
とは言えないまでも、「聴き合い、認め合えるような
授業作り」の実践への挑戦が、思ったよりもすぐに始
まったのである。私が教職大学院に入学し、なぜここ
まで対話にこだわるようになったのかということ、昨
年のメンターの先生の「学校にこそできることは、
友だちと共に学び合うことの価値や意味を実感しな
がら成長すること。それを支えていくのが専門性と
いいと考えている」という言葉が心に残って
いるからだ。対話に関して学んだことの素地があり、
子ども達の理想の対話の姿を思い描けていたため、
すぐに実践しようとしてみたが、やはりそう簡単に

はできないことを痛感した。主に社会科を教えているのだが、授業中に「先生、これ塾でやりました」や「もう知ってる」と言って、自分の知っていることをどんどん聞いて欲しい、伝えたいという思いから、友達の意見を聞けずにいる子が多い。しかし、塾や家庭教師、タブレット学習で知識を覚えられる、学力を伸ばせる今、学校の存在意義について改めて考え直してみると、やはり、学校はみんなで学びの価値を繰り上げていくことができる場で、そういう授業にしなければならないと思う。社会科は特に、子ども達の生きてきた環境や社会、経験してきたことが教科の学習に大きく影響してくる(特に授業を受け持っている小学校 3.4 年生の社会科は住んでいる地域や県、身近なところで働く人について扱うため)。だからこそ、社会科の事象について、異なる考えや経験を共有しながらクラス全体で学びの価値を繰り上げていきたいと思っている。

まだ始まったばかりの教師人生、今年は様々なやり方、内容に挑戦し、その経験を省察することによって学びに変えていきたい。

加えて、対話について、ストレートマスターが毎週金曜日に行っている金曜カンファレンスで検討した

内容についても触れたい。イマヌエル・カントの「啓蒙とは何か」についてだ。カントが考える認識の働きには、「感性」「悟性」「理性」の3つの心の働きがあることを知った。カントは、「悟性」を自ら考え、判断していく心の動きだと言い、他人の指導がなければ、自分自身の悟性を使用しえない状態を「未成年」と言った。「悟性」は誰しもが持っているが、自分自身の悟性を敢えて使用しようとする決意と勇気を欠くため、なかなか悟性を使用することができない。つまり、他の人の意見と違うかもしれないという不安から、決意や勇気が無いと悟性を発揮することができないのだ。授業に置き換えてみると、子ども達が「悟性」を発揮できるためには、自分の意見を十分に考えられる時間を確保したり、言い合えるような雰囲気作りをしたり、そもそも考える課題が、それだけの価値がある内容なのかを検討したりしなければならないと思った。「理性」は、自ら考え、判断したことをもとに、他者と協力し、合意形成しながら、より良いものや価値観を作り出していく心の動きであるが、これに関しては、周りの人たちとの話し合い、自分の意見を見直すことで新たな価値を生み出す機会は授業中にも多くあると考える。今後、このような理論も含めて、実践していきたい。



ミドルリーダー/マネジメントコースだより

人との出会いと学びの積み重ねを楽しむ

ミドルリーダー養成コース1年／福井大学教育学部附属特別支援学校

尾崎 由美

この春から、教職開発専攻ミドルリーダー養成コース(1年履修)で学びだし、あっという間に二つの季節を通り越してしまいました。昨夏の事前履修を

受けていた時の自分と比べると僅かながら成長していると感じています。昨夏は、ここで私は何を学ぶのかについて、意義、意味、価値、自分のこれからをず

っと考えていました。正直に申し上げると、ダークグレイの闇の中で常に彷徨い、常に悶々としていた自分がいました。それはゴールする自分の姿を全くイメージすることができなかったからだろうと思います。では、今はイメージすることができているのか。残念ながらその答えは出ていません。しかし、夏のcycleも終え、とても充実した気持ちでいるのは確かです。今年度の途中から参加形態をオンラインから対面に切り替えました。久しぶりに向かう会場は、敷居が高く感じられ、新しく会う方への初めまじの気持ちも合わさり、緊張と不安がありましたが、毎月の合同カンファレンスを終えたときの充実感は、オンラインで参加していた時と比べると雲泥の差でした。対面で語り合う、あの有機的な時間から生まれる充実感は、この時間を共有した人でしか味わえないと思います。いろいろな立場の方と同じグループになったの語り場。学校改革マネジメントコースの人は管理職もしくは管理職を目指している人？ミドルリーダー養成コースの人は、学校の中でのいわゆる中堅で、校務のリーダー的な役割を担う人？学生は将来教職に就きたいという志を持つ人？職種も立場も年齢も違う私がそのような方たちと交わって何を語るというのか、時間を共有することすら恐れ多く、自分で自分を卑下していました。しかし、この時間を積み重ねていくことで、この場には職種も立場も年齢も関係ないということに気づき、その構成こそが必要なのだと理解できるようになりました。そもそも学校は、職種、性別、経歴、専門性、知識、世代等、様々な人たちが混在し、多様性を持ち合わせた組織です。この多様な専門職との世代を超えた学び合いが実践されている現場の中で、そこに携わる人たちと、例え目の前に存在する子供たちがバラバラであっても、思いを持って子供たちと関わっていこうとしている人たちの実践や、活動や関りへの思いを聴くという時間がどんなに大事なことなのかを毎回感

じています。今までの自分であれば絶対手を取ることもなかった本を読み、その本に書かれている脈略と構成を掴んでいたり、先輩の書かれた実践を読み、追体験していたり、なかなか出来ない経験をしています。拙いながらに自分の実践を拾いあげ、省察しながらその稜線をつないでみる。それを他者に語ることで頭の中が整理され、時には自分への大きな問いをいただくこともあります。振り返り、まとめ、語ることで、その時の自分の心のありようが見え、位置も再確認できました。半年前は、あんなに、立場の違う人たちと交わることに不安を抱えていたにも関わらず、このコミュニティで聴き合い、語り合う時間が本当にわくわくして楽しい時間となっているのがとても不思議です。ところで、力量形成はできてるの？と聞かれると、それは自分で答えることはできません。しかし、一人の栄養教諭として、他教諭と同じ線上に立ちながら、違う視点で物事を見つめることが出来る力、また、他教諭とは線や距離、視点を変え、俯瞰しながら組織を見て他者と関わることが出来る力を、この学び合いの中で、感じ取り、見つけたと思っています。また、それらを職場に、仲間に伝播していきたいとも思います。気がつけば残り数か月。ニュースレター159号にも書いたように、栄養教諭としての根となる部分（給食マネジメント）は今までと変わらず大事にしながら、他教諭と連携し、特別支援学校という学校と子供たちを支え合う組織の中で、「子供たちの自主的な学びを支える教師」の一員として仲間と一緒に学校を作り上げていく力を、ここでの出会いの中で見つけ、学び、身につけていきたい。それには、残りの時間を、少しでもたくさんの方に出会い、楽しみながら学びを積み重ねていきたいと思っています。

「対話」が組織を動かす！？

ー「対話」の重要性を感じる 2 年目ー

ミドルリーダー養成コース2年／岐阜聖徳学園大学附属小学校

山崎 優

早いもので教職大学院での学びも残り半年となつてしまいました。入学してからを振り返るとたくさんの先生方と「対話」を重ね、自分自身を省察することができているように感じます。

夏期集中講座 Cycle2 で読んだ『学習する組織』。とても分厚い書籍を前に、「読み切れるのか！？」「理解できるのか」と最初は思っていたのですが、同じグループの先生方とカンファレンスを通して、自分の考えたことやそれに対するご助言やご指導をいただく中で、少しですが内容を自分のものとする事ができているように思います。「自己マスタリー」や「共有ビジョン」「チーム学習」など学習する組織の軸となる 5 つのディシプリンに触れました。企業を舞台にした内容であり、一見すると学校現場にそぐわないようにも感じていましたが、先生方との対話を通して学校現場にも十分通用するのだと思いました。この書籍の中で登場した「ダイアログ」が私は非常に印象に残りました。

この「ダイアログ」の視点で自分自身を省察すると、学級でも職場でもこのような場が少なかったように思います。学校という組織や文化の中で、「対話」は欠かせない重要な要素です。誰もが自由に意見を言うことが大切です。これは授業でも同じ。同じ子どもたちばかりが発言したり教師が一方的に話をしていたりしては、対話は生まれません。立場や肩書きに関係なく、誰もが思ったことや感じたことを発言する場を設けることが大事なのだと感じました。私は担任している学級で、今年度は「対話」を重視した学

級経営にチャレンジしています。毎日の朝の会（本校では「朝のみつめ」と呼んでいます）で日直がテーマに沿ったスピーチを行っています。時間は 1 分間。最初は、わずか 1 分を話すのに子どもたちは話題を悩んだり、話の構成を考えたり悪戦苦闘する姿が多かったのですが、二周り目くらいになると慣れてきたようで抵抗なくスピーチする子どもたちが増えてきました。このスピーチは話し手だけでなく、聴き手も質問をするようにしています。そこから「対話」が始まるのです。聴き手の各々が感じたことや疑問に思ったことを話し手に伝えて、話してはそれに答える。そこには自然と対話が生まれていました。この取り組みから私のクラスでは、新しい係が発足しました。ある児童の特技を生かして、係活動をしたいというグループができたのです。「対話」を通して、自分たちの学級を発展させようと子どもたちが動き出した瞬間でした。

人と人とが関わり合う学校現場。子どもたち同士、教師と子どもたち、教師同士、教師と保護者、地域などたくさんの人との関わりの中で学校は成り立っているのではないのでしょうか。そこにはやはり「対話」が欠かせないと感じています。「対話が組織を動かす」と私はここ最近感じています。カンファレンスでのたくさんの先生方との「対話」も色々な組織の原動力となっているように思います。残り少ない月間カンファレンスでの先生方とのセッションを大切にしていきたいと感じています。

「学びの中で出会う新たな自分」

～省察を通して物事の本質を捉える～

学校改革マネジメントコース1年/福井市和田子ども園 **青山 憲枝**

教育の在り方の変化を踏まえて自園の保育を変革していきたいという志望動機を持って教職大学院に入学し、早くも半年が経った。しかし、毎月の合同カンファレンスを通して、変革すべきは自分自身であるということに気付いたという内容を、前回（8月）のニュースレター・自己紹介で記した。ここでは、この半年で私自身がどう変わっているのかを書いていこうと思う。

この夏、担当する3歳児クラスでは、ふとした事がきっかけで「海プロジェクト」が発足した。「海」という大きなテーマのもとで、うきわ作りに試行錯誤したり、「海の水はどうしてしょっぱいの？」の疑問を調べていくという探求があった。担任チームは、プライベートで海に行った際に海水や貝殻などのお土産を持ち帰り、子どもたちはその中の磯ガニに親しみを持った。だが、海水の入れ替えは物理的に難しく時間の経過とともに悪臭がしてきた。死んでしまうカニもいて飼育は限界だった。若い先生たちに「どうしたらいいですか？」と相談され「先生たちの好きにしたらいいよ」と答えた。結局、子どもたちに相談することなく逃がした。私はその後、家の近くの川でサワガニを捕まえてきた。サワガニであれば磯ガニよりも匂いは気にならないし何より育てやすいと思った。

「お家に帰った」と伝えられていた磯ガニ。なのにまたカニが現れたことで喜ぶ子どもたち。すると、「このカニ臭くないね」とS君が言った。彼は磯ガニが匂うことに気付いていた。ならば、磯ガニはあのまま、子どもたちから「臭い」「何とかしなくちゃ」と声があがるまで待ち、そこから「じゃあどうする？」と皆で考えるべきだったのではないかと。「水が臭いからだ」と思うけど、海は遠いから毎日水を取りに行け

ないの」と現実を伝えれば、もしかすると「水道の水じゃだめなの？」という意見が出たかもしれない。水道水に入れられる磯ガニには申し訳ないが、そこからカニの探求が始まるのではないかと。死なせてしまって感じた気持ちをどうサワガニの飼育に繋げるか。川の水を汲んで来て入れ替える意味がわかり、生き物は生まれた環境が大切なのだとすることを掴んだのではないかと。これほど良い教材があったのに、飼育困難になった磯ガニを「好きにしていいいよ」と答え、みすみす手放してしまったことをとても後悔している。

教職大学院では、多種多様な先生方とのカンファレンスはもとより、他園の公開保育・夏季集中講座などを経て、レポート提出の課題がある。自分の能力上、仕事との両立も考えると残務が増えていくのは後に首が回らなくなることが明確だ。したがって、課題レポートはどちらかと言えばノルマをこなすというネガティブな作業だったように思う。しかし、今では、気付きや心が震えたことなどなるべくその感覚を鮮明に残したいという思いが強くなり、記録しながら再び深く考えるというポジティブな作業となっている。また、毎月の合同カンファレンスでの実践報告に備えて、保育の中での問題やもやもやすること、それを担任チームで話し合ったこと、取り組んだこと、その結果どうなったかなども記録に残すようになった。こちらは提出義務はないので、どちらかといえば保育日記のようなものだが、日々の迷いや葛藤がつぶさに残されていく。この、「課題レポート」と「保育日記」という記録作業を繰り返す中で、いつの間にか「私は何にひっかかっている？」「私はどうしたい？」という深い省察ができるようになっていくことに気付く。

前記のカニの事例では、これまで保育の中で暗黙にタブーとしてきた死や不衛生といった問題を「子どもに見せない方がいいことなのか？」と自問自答した。生きていく上で避けては通れない問題を、一緒に考えていくことこそが探求なのではないかと自己内対話を繰り返した。そして、それを基に保育の本質について担任チームと語り合い、今はサワガニの飼

育を通して子どもの探求を支えている。この省察力は、大学院での「対話すること」と「記録すること」から培われている私の新たなコンピテンシーであると言える。深い省察を通して物事の本質を捉えていくことは、大学院の志望動機だった「教育・保育の変革」に繋がる手掛かりとなる気がしている。

原動力は「やってみたいことを楽しむ」ということ？

学校改革マネジメントコース1年/福井市藤島中学校 大橋 圭子

つい先日、3年ぶりに東京へと足を運びました。感染者数が減少を見せ、10月11日からは政府の国内観光振興事業「全国旅行支援」が始まるとはいえ、県外へ出かけるにはかなりの迷いがありました。迷った末に出かけることにしました。

10月には、毎年私が心待ちにしている国語の研究会「ことばと学びをひらく会」が東京で開催され、この研究会に参加することが自分にとって大きな刺激と示唆を得て、次への活力となっていました。コロナ感染拡大のため、残念なことに、その会は、一昨年度は開催されず、昨年度はリモートでの開催（それでも開催されることがどんなにうれしかったことか）。そして、今年三年ぶりに、やっと対面での会の開催となったのです。9月に開催されることを知ってから、参加することをどうしようかと悩みました。いつもなら一緒にその会に出かける友人を誘って見たところ、今年は参加を見送るとのこと。どうしよう、優柔不断な私には決断できない日々が続きました。そんな私を決断させたのは読み飛ばしていた研究大会の案内にあった「本研究大会をもって一つの区切りとさせていただきます」の会長挨拶の一文。今年度で15回目を数える研究会が今回をもって終わるのだということです。行かなければきっと後悔する。そんな思いで参加を決めたのでした。朝6:00に福井を発ち、米原、名古屋で乗り換えて、9:40過ぎには会場の大学着。田町駅から会場まで歩くのですが、第7

回大会から参加してきて見慣れた風景に、やっとまたここに帰ってこれたという思いと、これが最後かという思いが交錯しました。

さて、研究会では、基調講演、参加者との対話を中心とした講座と、シンポジウム、特別記念座談会がもたれました。四つの講座のうち、私が選んだ講座のテーマは「今こそ聞きたい楽しい学び」。キーワードは、「『ねばならぬ』が楽しさを遠ざける」「教師の『楽しい』が子どもの『楽しい』へ」「『苦労』が生み出す『楽しさ』を」「『難しいのに』『やりたくなる』楽しさを」等々。今の自分が突き詰められないでいたことばかりです。中でも、講師の先生の「苦しさの伴わない楽しさはおもしろさにしかない」「子どもたちは本当は難しいことが好き」「子どもたちの興味関心に合わせるのではなく、子どもたちの興味関心を育てる」「話し合いには、育ててきたすべてが出る時間。それまでにどれだけの学びのコミュニティをつくってきたか。」といった言葉の数々は、珠玉の言葉でした。講座後、講師の甲斐先生に何年来の感謝の思いをこめて、短い言葉でですがお礼を述べ、シンポジウムへと向かいました。

さて、今年の4月から学校改革マネジメントコースでお世話になっていますが、半年を経過した今になっても、周りの人からは「定年過ぎたのに教職大学院に行くなんて・・・!」とか「自分にはできないわ。」などということを言われることがありますし、この

半年の間は会う人ごとにといいてもいいくらい言われ続けてきました。自分でも、もっと早くに志願すべきだったと思わないでもありません。しかし、昨年度までの私は毎日のことで精一杯（今年ゆとりを持って取り組んでいるの？と言われれば決してそうではありませんが）。でも、昨年度、定年間近になって、このまま教職大学院を経験せずに終わったら後悔する、その思いが自分を動かしての志願でした。そして、そんなふうに思えたのは、前任校至民中学校での先生方との学び合い、教職大学院の先生方との出会いと学ばせていただいたことがあったからこそだと感じています。先日の東京行きと同じで、後悔したくないから、自分のやってみたいということに取り組ん

でみているというのが現状です。先日の研究会で大きな満足を得て帰ってきたように、毎月のカンファレンスや集中講座では、一人の学び手となって、先生方と語り合い、必要に迫られて日頃読むことのないような専門書も読み、どうまとめようか悩みながらレポートも書き、また先生方と語り合うことから次への示唆や意欲もいただいて、十分学生としての時間を満喫させていただいています。すべては探究ということを考えるようになったのもこの半年間での経験を通してのことです。これからいろいろとどうしたらいいか迷うことも多いと思いますが、皆さんにいろいろ教えていただきながら進みたいと考えています。改めて、どうぞよろしくお願いします。

マネジメントに必要なもの

学校改革マネジメントコース2年/埼玉県戸田市立戸田中学校 藤田 政貴

20年以上の教職人生を経て、「これから」に漠然とした不安を抱えていた。そんな不安を取り払うために新たな学びの場を求めて福井大学連合教職大学院を受験してもうすぐ2年になる。当時感じていた不安は今もあまり変わっていない。スピードが増していく世界の変化、学校教育への新たなニーズ、ファシリテーターとしての教師の役割、そしてコロナ禍。そんな様々な教育課題を果たして自分はクリアできるのか、そんなことを今も考えている。

受験前にすでに自分は教頭・校長選考を終えていた。自分を育ててくれた先輩方への恩返しの気持ちで選考を受けた。しかしそれ以上に、あまりに多くの教育課題に個人で立ち向かうことに限界を感じていたし、むしろ自分が感じた限界や挫折を生かしながら組織的に課題解決に取り組むことが、子供を含めた皆にとってプラスになるのではないかと考え、管理職を目指した。そして、受験は迷うことなく学校改革マネジメントコースを選択した。学校を変えられるマネージャーになりたかった。

無事に教職大学院の仲間に入れていただけて本当によかった。振り返ってみると、教職大学院での学びは、自分に多くの「気づき」を与えてくださったように感じている。例えば、カンファレンスでのグループセッションでは、様々な立場の方々から刺激と教へと疑問をいただいた。自分とは異なる立場の方々からは、特に研究者としての視点から教育や学びを捉えていくことの奥深さを教えていただいた。また、自分と同じ管理職の院生の方々からは、組織を活性化させるためのアイデアや苦労、マネジメントの在り方を共有することができた。そんなこれまで出会った方々の多様性が、職場においてスタッフを育成する上で、個性や強みを生かしながら、いかに校内で十分に力を発揮させられる環境を整えるかが重要であることを教えてくれた。

もう一つ大きなポイントが「書物」である。特に夏期集中 Cycle で手にした本や資料は、こちらに入学しなければ一生目にすることのないものだろう。M1時代に読んだ『コミュニティ・オブ・プラクティス』

で分散型コミュニティについて知り、当時の職場環境に考え方を落とし込んだ時、自分の役割が明確になり、リーダーとしてコミュニティを構成するスタッフとの関係性を脳内にデザインすることができた。また、この夏に読んだ『専門職としての教師の資本』からは、力強い協働は、調整を急かされたり、押し付けられたり、強制されたり、人間関係をより良くするための働きかけを欠いたままに用いられたならば、効果を生み出さないことが示されていた。要するに、人を動かすには「押す」でも「引き寄せる」でもない別のやり方が必要となってくる。そこで自分が学んだ言葉が「ナッジ（軽く小突く）」だった。スタッフにちょっと気付きを促すという感じであろう。あるスタッフに実践したとたん、そのスタッフの業務に対する姿勢が変わった。どうやら自分は本書からナッジされたようである。

このように、教職大学院での学びを通して理論と実践の往還を重ねてきたが、往還の中で今自分がマネージャーとして重要視しているものがある。それは「直感」である。学校では日々様々な課題解決に取り組んでいる。そんな折、多くの要素が複雑に絡み合っている課題が現れることがある。そのような課題の解決を図るとき、様々な方策を練るが、常に何らかの「判断」が必要となる。判断することは管理職の重要な仕事の一つであるが、判断には直感がものを言

う。もちろん直感はあるゆる思考や理論、協議や検討の果てに生まれてくるものであるが、頭だけでなく心やセンスを磨いておくことも大切なのかな、と考え始めている。マネージャーは頭も心もマストである。どちらか片方では足りない。学びや自分磨きの幅を広げていきたいと考えている。

この原稿を仕上げているのは9月下旬である。教職大学院での学びも間もなく1年半を終える。振り返ればもうそんなに時間が過ぎたのか！？と驚いてしまう。まだまだ職場で実践できていないことや検証が必要な事項がある。カンファレンスでもっともっと学び合いたいという思いがある。自分に深みを持たせたいという願いがある。間に合うだろうか。それにしても、今日までこのコミュニティでたくさんの出会いを経験した。指導者や院生の方々をはじめとする「人」、書物に登場する様々な「人」、本当にたくさんの「人」との出会いがあった。「教育は人なり」と言われるが、「マネジメントも人なり」だと感じている。AIにはできない、心の通ったマネジメントができるようこれからもつまずきながら実践を重ねていく所存である。

さて、今後は、実践報告書をまとめていくことになる。どんな報告書ができるのか…。



夏期集中講座報告

夏期の学びを次につなげる

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市中藤小学校

中村 七海

大学院に入学し、初めての夏期集中講座が終わりました。もう1年の半分が終わったと思うとあっという間に感じます。夏期集中講座の前半の2サイクルでは文献を読み、それらから学んだことを共有するという授業でした。最後の1サイクルはインターンシップの振り返りをまとめ、共有しました。

前半の2サイクルではまず「文献を読んで内容を自分なりに解釈する」というところにとっても時間がかかりました。そして解釈するだけでなく、自分の経験と結び付けることで次の自分の実践へとつながっていきます。特に『コミュニティ・オブ・プラクティス』を読んだ際に、文献に出てくるコミュニティと自分が所属しているコミュニティを結びつけることが難しかったです。ですが、バドミントンのクラブチームと重ねることで少しずつ内容を理解することができました。

4月から7月のインターンシップを振り返った最後の1サイクルではたくさん行った自分の実践をしっかり見つめ直すことができました。伊那小学校の実践記録を読んだことで「振り返り」を重視した算数の授業を行ったことや3年生の学級経営を経験したことなど、じっくりと考えながら、チャレンジしながら実践を行うことができることはインターンシップ生ならではのということを振り返って感じました。

また、夏期集中講座を終えて課題も見つかりました。児童の見方と研究テーマを定めるという2点です。児童の見方についてはただ児童を見るのではありません。「見ていないようで児童を見る。」という

ところを重視したいと思いました。インターンシップ生というのは自分が実践をするよりも児童を見ている時間の方が多いです。その時にただ児童を見るのではなく、見ていないようで児童の変化に気が付き、支援を行っていく必要があります。現在のインターンシップでは雑巾がけをしながら児童を観察したり、他の子を支援しながら周囲の児童の人間関係を観察したりするということを実践しています。研究テーマについては入学した頃から何か研究を行いたいと思ってはいましたが、なかなか自分が研究したいことが見つからずにいました。夏期集中講座でインターンシップの振り返りをしていても、視点が定まっていないことに悔しさやもどかしさを感じました。しかし、小学校教諭を志しながらも特別支援学校教諭の免許を主免で取得した意味を探す中で、自分は特別支援学級と通常学級を繋ぐ存在にならなければいけないと考えるようになりました。そこで通常学級において「障害理解授業」を行うことで特別支援学級と通常学級を繋いでいきたいです。そのためには有効な「障害理解授業」を開発する必要があります。私は研究を行うコースではないため、自主的な研究という形にはなってしまいますが、地道に研究を進めていきたいと考えています。

時間は有限です。残された1年半をどのように過ごすのかは自分次第です。ただ過ごすのか、チャレンジをするのかで1年半の濃さは変わってくると考えています。周りに流されず様々なことに挑戦し続けられる人間でありたいと常に思います。1年の終わりには濃い報告ができるよう精進していきます。

夏の集中を振り返って―「探究学習」と「進路支援」―

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立丸岡高校/三国高校

東 哲平

7月に行われた集中講座について振り返る。サイクル1では、実践記録を検討するというので、私は附属義務教育学校の「プロジェクト型学習」について読んだ。附属が推し進めている探究型の学年プロジェクトといわれる総合学習は、私自身、学部の教育実習でも見たことがある。ただ、3週間ほどの短期間の活動を切り取って見ることはできなかったため、この本を読んで生徒の3年間のストーリーを追走、疑似体験できたのではないかなと思う。特に印象的だったのは、7年生の最初の段階から宿泊学習を行い、これからの探究学習におけるテーマを全員で話し合う機会が設けられているということである。直接民主制的な進め方は、一見、時間がかかってしまい難しいのではないかなとも思ったが、生徒自身の探究への熱（最初こそ実行委員会が中心ではあったが、徐々に他の生徒も巻き込んだプロジェクト学習になっていたことも興味深かった）があればこそ、話し合いも意見が飛び交う「議論」となり、探究を進めていく上での大きなターニングポイントなのだと思う。現在、高校の現場でインターンシップを行う中で、「探究」について色々と考える機会が増えた。今年は非常勤講師としても動いているため、昨年ほどインターンシップ先での総合学習に入れてはいない。そこが口惜しいのだが、その分自分でできることをしようと思い、非常勤講師という立場を生かして総合研究所の研修にも参加するようにしている。丁度、夏期集中の前後の時期にあった研修では、若狭高校の先生を講師に迎え、様々な高校現場の先生方と「探究」について考え、語った。自分から学びを求めていく姿勢

というのは、インターンシップでも昨年から実感したことであり、大切に続けていきたい。

サイクル2では、難しい理論書に挑戦した。昨年は『コミュニティ・オブ・プラクティス』を読み、学部の探求ネットワーク活動と紐づけながら自分なりに解釈し、読み進めたが、今回読んだのは、センゲの『学習する組織』で昨年よりも格段に読み応えのあるハードな内容であった。分かりそうで分からないという場面もよくあったが、院生研究室で院生同士で「ここはこういうことを言っているのではないかな」という話をしながら読み進めたことで自分一人の解釈に終わらず、他の人の視点も取り入れながら読むことができ、今振り返ると楽しかったと感じることができる。「ビール・ゲーム」や「ゆでガエルの寓話」など、印象的な話が多かった。近いタイミングで講師先の夏季講習もあり、その際に受験を控えた3年生に大学での学習の話などを紹介したところ、興味深そうに聞いてくれて、少しでも大学での学びのイメージを持ってこれからの進路学習に向かっていってもらえればと思う。教育系を目指す生徒も中にはいたため、今の自分の立場を生かして少しでも自分の進路のイメージを具体的なものにする一助とできればと思う。つい先日も、ある生徒のプレゼン試験の練習に付き添った。大学でも後期が始まり、各学校でも2学期前半が終わろうとしている。それぞれの進路を考え、行動していく重要な時期であり、インターンシップや講師先でも生徒のサポートをしつつ、私自身も修了に向け、「長期実践」執筆に励んでいく。

夏の集中講座を終えて

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学附属特別支援学校 **岩本 幸裕**

夏の集中講座、3サイクルを終えて、じっくりと理論書に向き合い著者の思いや考えを捉えていくことと、長期間の自らの実践を省察することの重要性を学んだ。サイクル1では、実践記録を読み、私は伊那小学校の実践記録に触れていったが何十年も前の実践であった。しかし、現在の教育でも重要視される内容と重なる部分が多くあり、古い実践でも多くの学びや大切にしなければならぬことが示されていると感じる。不易流行という言葉もあるが、これまでの教育で大事にされてきた変わらないものと、社会背景によって大きく変わっていくもの、最近の教育では生きる力の育成や ICT 活用能力など時代背景によって大きく変化している点に目が行きがちになるが、不易とされる部分についても考えていく必要があると感じた。伊那小学校は何十年も前から、子ども主体で、生活の中から学習の芽を見つけ育てていくことを大事にしており、伊那小学校の大事に積み上げてきた実践に触れることで、より、現在の自分の学校の不易なものは何なのかを考えるきっかけになったと思う。今後も教育の根本的に大事で変わっていかないものにも目を向けていきたい。

サイクル2は理論書を読み込む時間であった。私は「学習する組織」を読み、システム思考や組織を作っていく上での重要な要素について学んでいった。初めは管理職でもないし組織作りは自分にはあまり関係がないのではないかと感じていたが、読み進めていくうちに、システム思考で物事を捉えることの

大事さや組織作りは1人1人の行動によって大きく変わっていく点に気づき、自分自身にも大きく関係してくると感じた。「学習する組織」に出てきたシステム思考について、私は物事の全体像を把握する思考と捉えた。正直、文献を読んでいてこの捉えで正しいのかは分からないが、組織を作っていく上で、1人1人がその組織の全体像を把握していることは重要であると考えている。学校においても、スクールプランや目指すべき教育など、学校が大事にしていることを一教員も把握して動いていくことが大切であると考えている。難しい文献ではあるが、読み進めていくことでより深く、組織作りやシステム思考についての捉えが深まると考えている。今後も読み進めていきたい。

サイクル3では、自分自身の実践について省察し、文章化した。前期に取り組んできたことについて、インターンシップの1日毎の記録はあったが、それらを合わせて前期分の実践を省察したことはなかった。この長期間の実践についての省察により、子どもの学びのストーリー性や成長、私自身の考えの変化などを捉えなおすことができたと考えている。また、経験豊富な先生方と自分の実践について語り合うことで新しい視点やアドバイスなどももらえ、次の実践にもつながる有意義な時間になったとサイクル3を経験してきて感じた。1つ1つの授業の省察も重要だが、長期的視点での省察も変化やストーリー性を捉えていくことにつながっていく。今後も長期的な視点での省察にも取り組んでいきたいと考えている。

夏期集中講座を終えて

ミドルリーダー養成コース1年/福井大学教育学部附属幼稚園 **村橋 義人**

今回は私にとって初めての夏の集中講座となりました。4月、5月、ラウンドテーブルと過ごしていく中で、少しずつ教職大学院の雰囲気がわかり、私自身も自然体でいられるようになってきました。しかし、やはり「夏の集中講座」「3日間×3サイクル」というようなことを考えると、背筋が伸び、ドキドキという気持ちがありました。そんな気持ちを抱え、Cycle 1の初日、自分のグループの机に座ると、よく見慣れた、また、懐かしい顔が私の視界に入ってきました。今から15年前、高校1年生の私の担任をしてくれた先生が座っていました。「あの、先生、覚えています？」養子縁組をして、名前が変わっていた私は、旧姓を名乗り、かつての恩師に声をかけました。「ええ～、あの丸坊主頭がこんな好青年になっているなんて」そう言ってとても驚いた先生は、すぐに私のことを思い出してくれ、久しぶりの再会を喜び合いました。

そんな風にして始まった、初めての私の夏期集中講座。あの不安はどこへやら、恩師との再会で私の心はすっかり穏やかになっていました。また、私にとって初めては、もう一つあり、私は保育者人生で初めて「夏休み」を経験することになりました。今年の3月まで籍を置いていた高浜町立保育所時代は、子供たちがいない時はない、というくらい一緒にいたので、子供たちと離れて過ごす「夏」も初めてでした。しかし、この「夏休み」と「夏期集中講座」という時間が、今までの自分を振り返る良い機会となり、そこで多くのことを学ぶことができました。

Cycle 1では、伊那小学校の実践記録である「学ぶ力を育てる」を読み、そもそも子供とは？教師とは？という原点のようなものを再確認することのできた時間となりました。子供について、「ものがものとなる」という言葉が「内から育つ」ということを表しており、そこに教師としてのとらわれがあると、本来見

えているものが見えなくなるというようなことでした。そこで、保育者としての私にとっての「とらわれ」について考えた時、なぜそれを「とらわれ」と思っているのか、というところまで考えることができ、過去の自分を自然と振り返ることができました。そして私が考えた保育者としての「とらわれ」って、私と同じように考えている人もいるんじゃないの？じゃあそんな「とらわれ」を持つ先生たちに私ができることってなんだろう、と令和6年度に戻る予定となっている高浜町立保育所のことを意識して考えることもできました。

Cycle 2では「コミュニティ・オブ・プラクティス」を読み、実践コミュニティについて理解を深めてきました。「職員の協働性を育み、もっと連携をしていきたい」というような思いを胸に福井の地にきた私にとっては、何か手がかりが掴めるかもしれないと、少し読むのが楽しみでした。普段本を読まない私にとっては、すべてのことが新鮮でしたが、一番印象に残ったことは、実践コミュニティ育成の7原則の中の「さまざまなレベルの参加を奨励する」ということでした。今まで、職員全員の熱量を上げることが職員間の連携に繋がると思っていた私にとっては、まさに目から鱗の状態でした。しかし同時に、「それでいいんだ」という安堵感のようなものにも包まれました。教職大学院で学ぶことが決まった時、「職員の熱量の違いをなんとかせねば」という一種の使命のようなものを自分に課していましたが、見方や考え方を変えることで、新たな道が開かれ、楽に考えることができるようになりました。

そんな風に Cycle 1, Cycle 2 を過ごしていき、凝り固まっていた自分が少しずつ解きほぐされていく感覚を味わいながら、Cycle 3 を迎えました。

Cycle 3 では、今までの保育者人生を一から振り返り、その時どんな気持ちで保育していたか、どんなと

らわれがあったのか、何を大切にしていたのか、年代ごとに移り変わっていった自分の思いと初めて向き合うことができました。そして、すべてを振り返った後、自分が何を大切に、これから保育していきたいのかを考えることができました。それは大人も子供も「個性を認め合う仲間づくり」を目指していきたいということでした。具体的にどういうことをしていくのかは、これからの課題です。

新たな課題が見つかったことよりも、自分自身と向き合い振り返ることができたことが、初めての夏期集中講座での1番の収穫だったと思います。まだまだぼやけまくりの私のイメージを鮮明にしていくことを、今後の目標としてこれからも精進していきたいと思います。

夏期集中講座に参加して

ミドルリーダー養成コース1年/福井県立若狭高等学校 **横田 和也**

Cycle12は、校務の都合上、オンラインで参加させていただいた。Cycle3は、ようやく対面で参加できると意気揚々と家を出発したところ、豪雨に見舞われ、8号線の通行止めの渋滞に巻き込まれた。ニュースで、8号線も北陸道も不通と知り、Cycle3もオンラインで参加させていただくこととなった。このように、夏期集中講座は、結果的に全てオンラインでの参加になったが、それでも一緒にさせていただいた先生方のおかげで、とても充実した学びの機会となった。

Cycle1では、『福井発 プロジェクト型学習 未来を創る子どもたち』を読ませていただいた。その時のレポートタイトルは、「信じて、待つ、そして支える」だった。本校では、8月末に学校祭が行われた。学校祭には、各クラスが行う「クラス企画」というものがある。1年生を担当しており、生徒は初めてのクラス企画で、準備の仕方、見通し、運営方法に至るまで全く未知の状態であった。その中で、私はクラスをどのように支えていくかを考えた際、このCycle1での学びがとても参考になった。また、Cycle2で読んだ『コミュニティ・オブ・プラクティス』も参考になった。

昨年度の様子や「クラス企画」を行う上での最低限の説明はした上で、基本的には生徒を信じ、生徒に準備から当日の運営に至るまでを任せることにした。ただ、そこで意識したことが2つある。1つ目は、単なる放任ではなく、常に教室に居て、生徒が困っていたら、生徒と対話をし、考えを収束させたり、気づきを与えたりするようにしたことだ。2つ目は、統括責任者のみが頑張るのではなく、独自に副統括のポジションを設定し、統括責任者の呼びかけに応じ手を挙げた2名の副統括とともに3名でのコアメンバーとしてクラスを指揮する体制をとったことだ。また、各ブースリーダー(計4名)を含めた、合計7名での対話の場面を学校での準備中やオンラインで設定することで、対話を通じた合意形成の下で活動ができるようなしかけを行った。すると、私が思いもつかないようなアイデアもたくさん出て、事後アンケートではクラス全員の行事への評価も高かった。このように、夏期集中講座での学びは、私に大きな刺激を与えていただいた。引き続き、食欲に学びを深めていきたいと思う。

自らの実践と言葉を重ね捉えていく ー学び合うコミュニティの構築に向けてー

ミドルリーダー養成コース2年/奈良女子大学附属幼稚園 **鎌内 菜穂**

夏休み、『学校を変えるカーイースト・ハーレムの小さな挑戦ー』と『コミュニティ・オブ・プラクティス』の2冊の書と出会い直した。改めて触れたこれらの実践と理論が、私はどうありたいのか、今の私はどこにいるのか、そしてどこに向かうのかを指し示す言葉を与えてくれた。

「私たちは保育の話をしていない。だから一緒に話したい」

そんな思いから「D.D. (=daily dialog)」は始まった。令和3年度から始まったこの取り組みは、園内研修の一つとして、担当学年の教員4～5名で、日々の保育実践について毎日15分間語り合う試みだ。一年間続けてきた中で、その時にどのように判断してどう動いたのか、そこで子どもとどのような意味が生成されたかが語られることが増えてきた。

そして実践において、意味の生成を重要視してきたことによって、行事・研修・保護者との連携・教育実習など様々なことについて前年踏襲・伝統継承で進めることへの違和感を抱くようになり、あり方を

問い直すことが増えた。その都度「語り合う」時間を持ち、意味を見出しながら、前に進もうとしている。

「D.D.」は、『コミュニティ・オブ・プラクティス』でいうところの「暗黙知の共有」の場になったといえる。そして「暗黙知」を互いに交わらせることで、実践の質の向上を目指そうとしている。私たちはまさに「小さな学校」のように、園に関わる全ての人が匿名ではなく、それぞれが意思決定を行いながら実践を進めていく「共同体」になろうとしている。

そして、日々の実践をめぐる語り合いの習慣が、「私はどうありたいか」を問い直す機会を与え、園内の改革の渦が創り出され始めた。「D.D.」は他者との協働によって新たな意味を生成することを体感し、「コミュニティ」の中で生きることへのイメージを具体化させることを支えているのではないか。そしてようやく今、園は「コミュニティ」としての「孵化期」を通過し、まさに発展しようとしている渦中にいると感じている。園が「コミュニティ」として発展していく過程を、迷い戸惑いながらも支えていきたい。

バラバラのピースがつながった夏期集中講座

学校改革マネジメントコース1年/滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課 **村地 和代**

“研修の夏”教育行政機関は、長期休業期間は研修の企画・準備・運営に追われる。教職大学院に入学するにあたり、仕事と大学院での学びを両立できるのか不安であったが、夏期集中講座9日間の日程を何とか組むことができ、ほっとした。

「バラバラのピースがつながった。」9日間を終えた私の一番の感想である。三つのサイクルの内容は、サイクル1は、実践記録を読む、サイクル2は実践の架橋理論の検討、サイクル3は実践の事例研究とその方法であり、この三つのサイクルがどのようにつながるのか具体的なイメージができないまま夏期集

中講座を迎えていたため、三つのサイクルが自分の中で、整理され、つながったことは一番の感動であった。

サイクル1では、私は、『学校を変える力 イースト・ハーレムの小さな挑戦』を手にとった。私が本書を手にとった最大の理由は、著者のデボラ・マイヤー氏が幼児教育で得た経験を活かして小学校をつくり、さらに中等学校づくりに挑戦されたということに興味を抱いたからである。現在、日本では、幼児教育と小学校教育の連携・接続の取組が進みつつある。一方、幼児教育で培われた力が小学校教育に生かされておらず、どのように資質・能力をつないでいき、育んでいくのかについて課題があり、現在も全国で、試行錯誤されている。何よりも私自身の喫緊の課題である。本書を読み進める中で、幼児教育のよさを教科等の学習やカリキュラム、学校づくりへどのように生かしていったのか、そのプロセスをマイヤー氏と自分とを重ねながら、そして、マイヤー氏の理念やマネジメントについて考え、新たな知見を得ることができた。マイヤー氏の理念や大切にしたいことを言葉として伝えることはたやすい。しかし、本当の意味や目的を教職員と共有し、ベクトルをそろえるためには、長い時間と議論が必要であることが実践記録から見てきた。1学期に、私が担当している「幼保小の架け橋プログラム事業」の会議がうまく進まなかった現状があった。本書には、マイヤー氏も私と同様に、悩んだり立ち止まったりされることが描かれており、マイヤー氏をととても身近に感じ、同士のような（恐れ多い…）親しみを覚えた。

そんな私の悩みを、サイクル2では、E. ウェンガー他（櫻井祐子 訳）『コミュニティ・オブ・プラクティス』を通して、俯瞰的に理論的に整理することが

できた。教育現場では、意図的なコミュニティが大半を占める。教育委員会では、様々な事業において意図的なコミュニティを創りその運営にあたっている。私が担当している「幼保小の架け橋プログラム事業」もその一つであり、コーディネーターとして、本事業のモデル校園の先生方一人ひとりの意識や情熱を高めるためにはどうしたらよいのか、実践コミュニティを育成するために大切な視点は何か、本書に示された実践コミュニティ育成の7原則を基に、これまでの会議事例と絡めて検証していくことができた。もっと早い段階で、『コミュニティ・オブ・プラクティス』を読んでいたればよかった！と思うほどに、実践コミュニティを育成するコーディネーターの役割と今後の見通しについて学ぶことができた。

そして、サイクル3では、サイクル1・サイクル2で見つめ直した自分自身のことや、これまでの実践について、改めて問い直す時間となった。少しずつ書き進めていくのだが、事実だけでなく、その時に自分はどう考えていたのか、他の先生との関わりや投げかけについて、書いては戻りを繰り返すことで、その意味や意義について何度も問いなおすことができた。「書く」ことは、様々な角度から自分の実践を振り返ることであり、ぼんやりとしていた思いや考えを明確にしていく作業である。その作業を通して、自分が上司や同僚に支えられていることを改めて感じ、幸せな気持ちになると共に、これから自分が取り組むべきことを確認したりすることができた。

三つのサイクルを通して、この夏の自分を書き残すことができた。次の冬期集中講座で自分は何を感じ、考えるのだろう。新たな自分に出会えることがとても楽しみである。

変革の時代に必要とされる学校や教師のあり方

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井県教育庁高校教育課 吉田 英史

コロナウイルス感染拡大に伴う社会の混乱に代表されるように、今まで 100 年かけて変化してきたものがこれからの社会は5年で変化する VUCA ともいわれ、現状の教育からの脱却が求められるようになった。コロナウイルス感染症の拡大はまさしく VUCA が具現化されたといえる。学校の一斉休校によって私たちは未知の経験に恐怖しマニュアルどおりでは立ち行かないことについて考えさせられた。Society5.0 では AI の発展により考えられる問題のほとんどが AI によって解決されていく。一方で AI では解決できない課題に取り組む力が必要となる。だからこそ教育では暗記する知識ではなく、生きて働く知識・技能や、未知の変化に対応できる思考・判断・表現、学びに向かう力、人間性の涵養が求められる。

学習指導要領にあるように、標準化された内容を教えるのではなく、今後学校ごとに育成したい資質能力を定め、地域や保護者と連携した学びが求められる。そのためには管理職のリーダーシップと教員間の連携、学習評価の充実が求められる。「大きな絵」の作成が必要になってくる。公立の学校であっても標準化した学びからの脱却が必要となってきた。学校独自のカリキュラムを定め、カリキュラムマネジメントを行うことで個性豊かな学校の学びを進めていかなければならない。教職大学院ではこれから求められる授業デザインと評価について学んでいきたいと考えた。

教職大学院で集まった先生方は学びたいことがバラバラかと思ったが、実は新しい学びに対して教員がどのように取り組んでいくのか、という点で一致しており、地域からどのように学んでいくのか、思考判断表現の力を組み立てていくための授業デザインについて、学びを見通した学習評価をどのように作っていくかなど問題意識をもって協働して学ぶこと

ができる。全国から集まったメンバーで新しい学びについて考えていくことはとても充実している。

教師にとって標準化は分かりやすい。何十年前も前のノートを使い、電子化されたワークシートの内容を微調整するだけで、生徒や時代の変化に大きく対応することもないからである。教育の世界ではこの何十年前も前の駄菓子屋の商法が繰り返され、教育方法のイノベーションが妨げられてきた。その主要因は標準化である。今後求められる教育とはどのようなものか。教師がやりがいを持ち、自由裁量が与えられ、個性豊かな教育を進めることが求められることは自明である。部活動をはじめとして教師のガマンによって成立していた教育システムは大きくマスコミに叩かれ、今後教員希望者はさらに減少していくことが予想される中で AI の導入や民間への移行は避けられない現状があり、積極的に進めていく必要がある。標準化されたシステムにおいては学び合うコミュニティは発展しない。

学校はそれぞれ異なるアプローチで改善に取り組むことで、ますます成果を上げることが可能になる。そのためにも学校の個別最適化も必要とされている。

私たち教師は学び合えるコミュニティを作り、話し合い、今後の脅威に立ち向かわなければならない。生徒に求められている学力と同様の学力が教師にも必要になる。ただ、現状の業務状態でコミュニティの作成は可能なのであろうか。少なくとも放課後に部活動がある。部活動は教員にとって必要な業務なのか。そのほかの業務のスリム化ができないか。高度経済成長期の箱型の学校スタイルを維持していくには限界がある。何時間も課外授業で教科書を詰め込み、足りない分は何時間もかかる宿題を課す。このようなスタイルでは私立はもちろん N 高をはじめとする新たな選択肢には立ち向かえない。

夏の集中講座で小浜二中の加畑校長先生の話には大変感銘を受けた。よく働き方改革というが、働き方改革とは単に引き算の話ではなく、教師が学びたいことを学ぶことができるという適切な足し算も働き方改革である。教職大学院の学びのスタイルを学校に落とし込む手法はまさしく新しい働き方改革の考え方である。

探究的な学びが推進され、学習指導要領が改訂されたことによって、学校ごとで地域と協働した探究

型のカリキュラムを作成し学習評価を定めていくためには教員が目指すべきベクトルを議論しながら合わせていく必要がある。なぜ地域と協働する必要があるのか。主体的に学習に取り組む態度はどのように評価していく必要があるのか。生徒たちの思考・判断・表現を育成するためのテストをどのように組み立てていくか、などは個人プレーでは限界がある。私たちは教職大学院で学んだことや、教職大学院での学びのスタイルを現場に落とし込む使命があると考えた。

夏期集中講座 2022 Summer Cycle を終えて

学校改革マネジメントコース2年/福井県立大野高等学校定時制 上中 一司

1 夏期集中講座の意義について

昨年度の夏期集中講座は、参加者の殆どがリモート参加でしたが、本年度は、対面参加者がリモート参加者よりも多く、コロナ感染症への世間の認識の変化を感じました。

本年度の、課題図書選定の際に、昨年度読んだ、「福井大学教育地域科学部附属中学校 学び合う文化 第1巻」と、「コミュニティ・オブ・プラクティス」を思い出しました。両方とも印象深く、「学び合う文化」では、探究を利用した授業のあり方や、教員が研究主題に主体的に取り組んでいく「学校文化」という概念を学びました。「コミュニティ・オブ・プラクティス」では、コミュニティの意義、作り方、維持の仕方等を学びました。福井大学教職大学院を修了した方々から「コミュニティ」という単語が出てくるのは、全員が課題図書として「コミュニティ・オブ・プラクティス」を読んでいるからだと思っています。それくらい、夏期集中講座は、教職大学院生にとって重要な講座であると感じています。

2 夏期集中講座を終えて

今年度は課題図書として「福井発 プロジェクト型学習 未来を創る子どもたち」と、「専門職としての

教師の資本」を読みました。「福井発 プロジェクト型学習 未来を創る子どもたち」は、昨年、衝撃を受けた附属中学校の取組みを深く知りたいと思ったからです。印象的だったのは、3年間の「学年プロジェクト」を通して成長していく生徒の姿でした。OECDが提唱している「変革する力」の1つに、「対立やジレンマに対処する力」があります。この力は受動的に授業を受けているだけでは身につけません。私は、どのように、この力を育成するのが課題だと感じていました。しかし、本書では「学年プロジェクト」を通して「対話」を中心にプロジェクトを進めることや、「失敗を体験させる」場を設定することにより、対話をしながら失敗から成功に結びつけていく様子が記されていました。読み進めての感想は、「学年プロジェクト」には多様な仕掛けが用意されていることで、3年間かけて実施するからこそ「対話」や「失敗体験」の時間的保証がされていること、3年間の中でリーダー、フォロワーの両方を体験できるからこそ、それぞれの役割を理解でき、将来困難な場面に直面しても、自分が置かれた役割の中で解決策を探る力を身につけられること等があります。「学年プロジェクト」は多くの知恵が詰め込まれた世界に誇れるプロジェクト学習だと感じました。

「専門職としての教師の資本」では、アメリカ教育界の衰退を事例に、PISA の学力調査の成績上位国は、どのような取組をしているのかを知ることができました。本書には『多くの国は、子どもたちの学業成績に相関する、学校内の重要な条件は「教師の質」である事に気づいている』と記されています。成績上位国を調査すると、概して教員の地位は高く、教員が良い労働条件で働けるように国が投資しているそうです。それ故、教職に魅力を感じた良い人材が集まり、他者と学び続けるコミュニティが生じることで、良質の

教師集団を育み、強化し、維持していることがわかりました。福井大学教職大学院でのキーワードに、「コミュニティ」や「省察」があります。2年間参加した夏期集中講座では、「コミュニティ」の作り方や、クロスセッションを通しての「省察」を学びました。教員免許更新制廃止に伴い、教員の資質・能力は、校内で育成する方向性になると考えます。夏期集中講座で学んだ「コミュニティ」や「省察」を、今後の校内の研修等で生かしていきたいと思います。



宮古島ラウンドテーブル報告

実践研究宮古島ラウンドテーブル2022を終えて

宮古島市教育委員会 教育長 大城 裕子

宮古ブルーの海と白い砂浜が美しさを増す8月、県内外の多くの先生方が宮古島に集いました。地域・学校種・役職の枠を超えて、これまでの実践、教師としての成長のプロセスを語り合いながら、子どもたちの主体的な学びを支え、共に成長する教師像・学校像を考えることを目的として開催された「実践研究宮古島ラウンドテーブル2022」に参加するためです。東京サテライトの院生の皆さんや関係者の皆様、遠路遙々宮古島までお越しくださいまして、誠にありがとうございました。本市から参加した先生方にとりましても、地域の教育を共有し、多種多様多層の先生方と学び合う機会を得られ、有意義な時間だったと確信しています。

参加者を対象とした宮古島 RT 2022 後のアンケート回答の中に、「小・中・高・大の先生方が集まっていたので、生徒の学びを立体的にとらえることができたように思う」「探求学習に地元の伝統文化や産業を取り入れた持続可能な学習教材の有用性につい

て学ぶことができた」「新たな学習を計画する際に、外に目が行きがちであるが地元の学習資源の有効利用こそ、子どもたちのみならず、地域のためにも大きな役割を果たすことを実感した」等がありました。それぞれの視点で今回の RT を捉え、学びあいを通して、明日へのヒントをきっと見いだしたことでしょう。参加者の皆さんからは、自ら選択した教師という職業に真摯に向き合い、仕事を砥石に自分自身を磨こうとする姿勢が感じられ、感銘を受けました。

今回の宮古島 RT への参加により、多くの出会いがあったことと思います。「いちやりばちよーでー」、沖縄の方言で「出会えば皆兄弟」という意味です。このご縁を大切にして、今後のコミュニティ形成に生かし、多くの仲間と共に教師としての思いや悩みを分かち合いながら、教職を心から楽しみ、子どもたちと共に魂を揺さぶられるような経験を重ねていってほしいと思います。

そして、お一人おひとりの磨かれた心に子どもたちの多くの笑顔が映るよう、心から願っています。ありがとうございました。

新たな「協働」のかたち

札幌市教育委員会 指導主事 西野 功泰

ラウンドテーブルへの関与の仕方には段階があり、「参加者」から「協力者」、そして「主催者」へと立場を変えることによって、得る学びが違っていると考えている。一番学べるのは主催者である。何故主催者が一番学べるか、それは、場づくりの過程の中で、「構想力」と「実行力」が磨かれ、個人ではなく、様々なつながりを活かしながら目的を協働によって達成するための舵取り役を担う経験を積めるからである。だからこそ、そう容易いことではない。

宮古島ラウンドテーブルの主催者のひとりである福島昌子先生とは、連合教職大学院ミドルリーダー養成コース一期生の同期である。同期と言っても福島先生は経験豊富なベテラン教師であり、大学院在籍1年目は附属高校の管理職をされていた。「なぜミドルリーダーコースなのですか」と聞くと、「学び続ける実践者でありたいから」と仰った。当時、その言葉を聞いて、これからはじまる大学院生活に胸を弾ませた。

宮古島ラウンドテーブルは、本来であれば令和3年8月に初開催の予定であった。新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、開催予定日の前日まで関係各所と調整し、開催するか否かの判断に頭を悩ませたと聞いた。結局中止にせざるを得なくなり関係者は涙したという。こうした話を聞いていたこともあり、今回「協力者」としての役割が自分に務まるのかどうか不安だった。

講師依頼を受けた日の晩に、自宅の本棚から福島先生の長期実践研究報告書を取り出した。改めて読み直すと、初めて生徒たちと沖縄を訪れた際の感情の揺れ動きや、あらゆる教育の場をもって人間教育を行おうとしていたこと、管理職として学校間の学び合い（協働）を積極的に進め、先生方を孤立させず、学校外の教育機関等と協働し学び合う機会を生み出そうと考え実践されていたこと等、以前とは違う文章に目が留まった。今もなお学び続ける実践者であることを体現されている福島先生の試みは、着実に宮古島ラウンドテーブルへとつながっており、高校現場から教育行政に異動した私を奮い立たせた。

開催当日、宮古島の先生方が全国から集まった職種、校種、役職、年齢が異なる方々と対話を重ねていくうちに、表情が和らぎ、誇らしく自らの実践を語る姿が印象的だった。自分たちの実践の持つ意味や価値に気がついた瞬間である。

参集型の開催には余白の時間がある。青く透き通る海や満点の星空を眺めながら、互いの実践を語らいあった。場の力とはすごいものだ。数週間が経過した今も、宮古島の歴史と伝統、そこに暮らし働く宮古島の人々の表情や言葉が頭の中に蘇る。

今回の宮古島ラウンドテーブルは、住む場所や働く場所に関係なく、全国を結ぶネットワークを駆使しながら、必要な場づくりを、そこに集う人々と協働しながら創りあげることができることを実証した新たな「協働」のかたちであったと感じている。



NITS（教職員支援機構）研修報告

NITS「研修デザイン力育成セミナー」に思う

福井大学教職大学院 教授 小林 真由美

8月4日、5日の2日間、NITSが主催する「研修デザイン力育成セミナー」にグループファシリテーターとして参加した。2日間の日程はまさに、福井大学教職大学院モデルともいえる構成になっていた。

「3つの種」からスタートして、「令和の日本型学校教育を担う新たな教師の学び」についてのミニ講義の後、答申等を各自で読んで語り合う。そのあと、研修に関係する「実践報告書」を読んで再度、語り合う。2日目は福井大学教職大学院ではおなじみの「コミュニティオブプラクティス」を読む。語り合いを重ね、最終サイクルは省察も兼ねて自分なりの「構想メモ」を作成する。最後のカンファレンスはクロスセッションを実施し、違ったメンバーに学びを語る。福井大学教職大学院では、いつもこのような流れで研修のサイクルが流れていく。

私のグループは別の県の指導主事2人、小学校校長、私立高校教頭、そして特別支援教諭と様々な立場での先生方であった。立場は違うものの、かかえている課題はこの「研修デザイン力育成セミナー」のタイトル通り、「学びに向かう教師」をどう育成し、その研修をどう組み立て「自発的な学び」につなぐかを探っていきたいということであった。具体的には次のような課題であった。

○自分は学びたい気持ちもあるが、そう考えない者にも、研修を企画する立場として、魅力ある研修つまりは自発的な学びを呼ぶ研修をどう企画するか

○私立高校という閉鎖的な集団の中で、本当のコミュニティをどうやって作っていくか

○学校の研究主題に合わせて、活気ある校内研究をどう仕組むか

○個人の意欲を絡めながら、ニーズをキャッチして、どのように全体としてつないでいくか

3つの種を紹介し始めた頃には、これまで参加した研修や自分で企画した研修内容について、みんなが遠慮がちに経験をもとに報告しあっていたが、そのうちに「アンケートをとると、形式的にたまったとはいうものの、本当はつまらない、がっかりが多い研修も少なくない」「自分で学ぶことは大事だが、受け身形で知識を得る方がいい、という人もいる」「研修を受けた後、どうやって共有するのか。学校にどうもち込むのか」など日頃から疑問に思っていたことも、自由にだせるようになってきた。やはり、語ることは大事で、徐々にグループ内での共感が生まれてくる。

サイクル2では「令和の日本型学校教育を担う新たな教師の学び」と題して、荒瀬先生からの講義、そして「新たな教師の学び」への4つの提言を読んで、その学びを共有した。提言の中でいたるところに出てくる「教師は研修や研究という学びを通してその過程そのものが、子供たちのロールモデルとなる」ことを再確認した。「求められる新たな教師の学び」として答申などを読んだ後のディスカッションの中では、「自立した学習者」というキーワードがグループで盛り上がった。もともと子どもたちが「学びたい」と思っているのと同じように、先生だって「学びたい」と思っている。私たち自身が子どもたちの新しい学びの姿をめざそうとしている今、やはり、教え込まれ

る授業や研修で育ってきたことによって、私達自身が、まだまだ発想の転換ができていないということを感じ知った。「やっぱりどこかで、ちゃんと教えてほしいと思っているんですよね」「自立した学習者にはなっていないんですよ」と互いに自分自身もその「メンタルモデル」から抜け出でていないことを、再認識した。

そんな熱い話し合いの後、サイクル3は実践報告を読んで語り合う。それぞれ自分が感じてきた課題にあったものを選んだので、それぞれの立場からの報告を聴くことができた。特別支援教育センターのインクルーシブ教育に繋がる教育センターとしての役割、高校における授業改善プロジェクト、キャリアアップシートを活用した自己評価から各自の課題を捉える試み、そして新たな研修制度への提言その中でやはり、先生の研修に対しての自主性を生むにはそのニーズに応えること、そしてそのニーズを知るための「対話」の重要性を再び確認し合った。「どんな素晴らしい先生の授業でも、子どもたちの語り合いから生まれた学びにはかなわない」とあるように、先生にとってもどんな評価指標を用意しても、管理職からの一方的な働きかけではなく、先生たち同士の語り合いから、真の学びは生まれてくることを痛切に感じた。

「私達の市では、他校との繋がりを生み自主的なコミュニティが生まれるように、月2回放課後30分の話し合いをコーディネートしています」という投げかけは、くしくも次のサイクル4への架け橋となった。その話し合いの場を生むには、いわゆる「実践コミュニティ」を作り出すことが次の課題となってきたからである。

サイクル4は理論書「コミュニティオブプラクティス」を読む。しかしながら短い時間ですべてを読み通すのは難しい。第3章の「育成の7原則」を読んで、最も気になったところ、そしてわかりにくかったところを語り合った。メンバーみんなが共感を得たのは3つ目の原則「さまざまなレベルの参加」である。これまでの学校経験から様々なコミュニティを目にしてきて、より多くの人の参加を促すことに悩んで

いる先生方の思いの表れであろう。周辺メンバーの参加が受け入れやすいよう「ベンチを作る」「はいらなくてもいいのよ」という発想は、免許更新制や法定研修にはなかった、参加の自由という新たな観点であった。だからこそ「学びたいことを自由に選べる仕組み」が必要でオンラインの可能性も鑑みて「国レベルでどこからでも参加できる」研修の可能性について語り合った。最後に「昨日、役所に帰ったら上司から何を学んだのかと聞かれたけれど、そんな問いに一言で答えられない深い学びがあった。それこそが本当の研修で、一律にみんながこう学びましたという答えができるような研修は薄い」といわれた。まさにその通りで、ここまでのサイクルの中で、活動は同じ事をしていても、先生方の学びは、それぞれ自分の経験とかみ合っていて様々な声を聞くことができています。アンケートをとって、みんなが一律に同じような感想を書く研修では、本当の教師としての大きな成長には繋がらないのだと確認し合った。

そして研修は大詰めに入り、今度は「構想メモ」として学びを書き表していく。

「今、考えた研修の姿は、理想論だけどそれを実現させていくことを具体的に考えてみる」「研修アマゾン、ができるといい。手軽にネットショッピングできるみたいに」「自分の学校の中の今ある名ばかりのチームを一度崩したい。そこから少しずつ本当のコミュニティを育てたい」とそれぞれが自分の構想をすりあわせながら考え始めていた。

出来上がった構想メモは、クロスセッションで別のグループと共有した。

ここでは、また別の考え方を受け取ることができた。一斉講義なら、どんな素晴らしい講義でも感想はだいたい同じようなものになるはずだが、グループが変わると課題の中心も、それぞれでまた、違ったものになっていく。「素晴らしい研修を受けても、その学びをどう広めるとよいのか」「学びが残せる受講履歴とはどのようなものか」「若手を育てようとしている管理職の考えが柔軟にならない」などまた新たな課題が新鮮に感じられ、今回の研修における学びは、

本当に大きく深く様々な方向に発展していることに改めて感動した。

最後の省察のサイクルでは、「この2日間の学びは、ここからが実践につなぐスタート」と共有し合い、互いにぜひあと半年くらい経ったときに、どのように生かされてきたかを語り合おうということになった。偶然に集まったこのコミュニティも継続の可能性が

ある。翌日にはメンバーのアドレスが次々と送られてきた。校内研修と違って、コミュニティを持続させるには、意図的な仕掛けも必要であろう。ベンチは置かなければ座って語りあえない。私も含めてこの2日間で、考えた様々な課題はこの先、メンバーの先生方の取組によって実践に結びつき、さらにそれを振り返ることで、この研修の意義もさらに大きく深くなっていくと感じている。



研究会等情報

公開研究会の季節がやってまいりました。

次ページ以降、研究会等の案内が寄せられた情報を掲載しています。

皆様にとってもお忙しい季節だとは思いますが、同僚の学びに耳を傾ける機会としてはいかがでしょうか。

●研究会／研修会

- ・10月28日（金）福井市至民中学校 公開研究発表会
- ・11月2日（水）福井大学教育学部附属幼稚園 第32回幼児教育研究集会
- ・11月12日（土）NITS・福井大学連合教職大学院 コラボ研修
- ・11月16日（水）坂井市立丸岡南中学校 自主研究発表会
- ・11月25日（金）福井市安居中学校 創立10周年記念公開研究会
- ・12月17日（土）奈良女子大学附属幼稚園 オンライン型研修（令和5年）
- ・1月27日（金）福井大学教育学部附属特別支援学校 公開研究会
- ・3月7日（火）～9日（木）福井県教育研究所 ふくい教育フォーラム

●入試説明会

- ・12月25日（日）福井大学連合教職大学院入試説明会

※公開版発行時点ですでに実施済みとなっているものもありますが、ご了承ください。

また、丸岡南中学校の自主研究発表会のお知らせを追加しました。

令和4年9月 吉日

各教育委員会様
各学校長様
教育関係の皆様

福井市至民中学校
校長 秦 計代

令和4年度 福井市至民中学校 「公開研究発表会」の御案内 (2次案内)



本校では、学校教育目標「未来につながる学力の育成」を目指し、研究主題「学びのストーリーをデザインする」のもと、各教科の授業において、教員が生徒の学びを予想して授業をデザイン(単元構成)し、その学びを的確に見取り、省察、修正を加えながら、ストーリーを編み上げていくことを目指して研究実践に取り組んでいます。また、本校の特色を十分に生かした特別活動、総合的な学習の時間を軸としたキャリア教育を推進し、共通実践しています。生徒一人一人があらゆる場面で学びのストーリーを描けるよう、教員がチーム一丸となり、授業力・指導力の向上を目指します。

つきましては、下記のとおり、公開研究発表会を開催いたします。多くの皆様の御参会を賜りますよう、御案内申し上げます。

研究主題

学びのストーリーをデザインする

- 期 日 令和4年10月28日(金)
- 会 場 福井市至民中学校
- 日 程

全体会	移動	公開授業	休憩	教科別 研究協議会	移動	講演会
12:30	12:45	13:00	13:50	14:05	14:45	15:00
						16:30

公開授業内容

	学年・組	教科	授業者	単元名
公開授業	1年4組	国語	宮嶋 奏恵 教諭	蓬萊の玉の枝 ―「竹取物語」から
	2年1組	社会	佐々木徳之教諭	地域調査の手法（地域のあり方）
	1年3組	数学	小林 拓馬 教諭	移動と作図
	3年2組	理科	加藤 学 教諭	身のまわりの現象
	2年4組	英語	竹澤 沙貴 教諭	Unit5 Universal Design

講演会

演題 「学習指導要領に込めた願い」

講師 長田 徹 氏

文部科学省初等中等教育局 教育課程課 教科調査官

国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター キャリア教育総括調査官

参加について

<申し込み方法>

右のQRコードより必要事項をご記入の上、
10月13日（木）までにお申し込みください。

*社会情勢を鑑み、予定の人数に達しましたら、
申し込みを打ち切ります。

*体調不良の場合は、参加をお控えください。



校舎案内図



それぞれの公開授業会場については、当日提示します。

～ 本件に関するお問い合わせ ～

〒918-8032 福井県福井市南江守町 65-20

TEL 0776-35-3840 / FAX 0776-35-8012

E-mail shimin-j@fukui-city.ed.jp

研究主任 岩壁真紀子

令和4年度 福井大学教育学部附属幼稚園 第32回 幼児教育研究集会



研究主題

つながりが育む学びの深まり ―好きが広がり、世界をひらく―（1年次）

子供たちは遊びの中で様々なもの、こと、人や自分と出会い、試行錯誤しながら感覚をひらき、さらなる探求へと遊び込んでいきます。人と人、ものやこと、過去と未来、もちろん遊びと遊び、好きな遊びとみんなの時間…。様々につながりあいながら多様な出会いの中で、子供たちが主体的に遊びを進め、遊びのストーリーを紡ぎながら好きになっていくプロセスの中で、資質能力が育まれます。また、好きになったことが周囲に広がったり、自分の中で広がったりしていくことで、さらに個、集団としての高まりへとつながっていきます。そのために、教師はどのように遊びを見取り、多様なつながりの中で援助し、環境を構成していくとよいでしょうか。年齢別分科会やシンポジウムで参加者の先生方と協議し、深めていきたいと考えています。是非、ご参加ください。

1 期 日 令和4年11月2日（水）

2 場 所 福井大学 教育学部 附属幼稚園

3 日 程



8:30	9:00	9:15	11:45	12:00	13:00	14:30	16:00
受付	研究概要 説明	公開保育	移動	昼食 休憩	年齢別研究会	シンポジウム	閉会

4 指導助言者・研究協力者・保育者

	3 歳児	4 歳児	5 歳児
指導助言者	橋本 登茂江先生 福井市子育て支援課 保育参事	坂ノ上 忍 先生 県教育庁義務教育課 指導主事	西片 善江 先生 市教育委員会学校教育課 指導主事
	谷 裕子 先生 福井大学連合教職大学院 CR	宮本 雄太 先生 福井大学連合教職大学院 講師	岸野 麻衣 先生 福井大学連合教職大学院 准教授
研究協力者	玉村 美幸 先生 越前市認定こども園北日野 園長	高橋 初美 先生 聖三一幼稚園 園長	篠島 律子 先生 勝山市立成器南幼稚園 園長補佐
	伊藤 仁美 先生 森田さくらこども園 園長	後 拓真 先生 高浜町立内浦保育所 保育士	谷本 千穂 先生 福井市立森田浜保育園 主任保育士
	荒木 良子 先生 福井大学連合教職大学院 准教授		船谷 友代 先生 福井大学附属特別支援学校 教諭
保育者	前田 祐子（すみれ組） 有馬 詩野（ゆき組） 牧田 祐子 横山 香奈	金剛 智恵子（ばら組） 村橋 義人（もも組） ツシマ 由佳	上田 晴之（ほし組） 廣瀬 友加里（つき組） 高橋 浩美

5 シンポジウム

テーマ「つながりが育む学びの深まり –好きが広がり、世界をひらく–」



シンポジスト
無藤 隆 先生

白梅学園大学大学院 名誉教授



シンポジスト
堀越 紀香 先生

国立教育政策研究所 総括研究官



コーディネーター
岸野 麻衣 先生

福井大学連合教職大学院 准教授

6 申込み

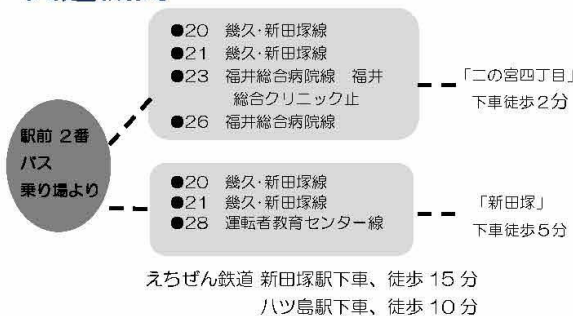
- ・定員各学年20名までといたします。
- ・7月15日（金）よりホームページ内の「参加申込みフォーム」からお申し込みください。
申込み締切は8月28日（日）です。（各学年定員に達しましたら、ホームページにてお知らせします）
- ・申込み完了後、入力いただきましたメールアドレスへ、申込み完了メールを送信します。
- ・新型コロナウイルス感染症の感染拡大や気象状況等により、研究集会を延期や中止にしたり、内容を変更したりする場合があります。その場合には、ホームページでお知らせします。研究会前日にホームページをご確認ください。

福井大学教育学部附属幼稚園 ホームページ URL <http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzokuyo/>

7 資料代 ~~2,000円（指導案、紀要を含む）~~

- ・昼食は各自ご持参ください。

8 交通機関



※駐車場の収容台数に制限がありますので、なるべく公共交通機関をご利用ください。

園で複数でお申込みの方は、乗り合わせてお越しいただけますようお願いいたします。

9 問合せ先

国立大学法人 福井大学教育学部 附属幼稚園

〒910-0015 福井県福井市二の宮 4-45-1

TEL : 0776-22-6687 FAX : 0776-22-6718

MAIL : fuzokuyo@f-edu.u-fukui.ac.jp

NITS・福井大学連合教職大学院・コラボ研修

福井大学連合教職大学院

東京サテライト・ラウンドテーブル

2022

第2版

子どもたちの Well-Being を ～つなげる教育～ 生み出す教師の探究

☑ 2022年11月12日(土) 10:00-16:30

参加無料・zoomオンライン開催

第1部 講演会 荒瀬 克己

(独立行政法人教職員支援機構理事長)

京都市立堀川高等学校長、京都市教育委員会教育企画監、大谷大学文学部教授、
兵庫教育大学理事、関西国際大学学長補佐を経て現職。

「一人ひとりの子どもを主語にする学校」



第2部 実践発表

<沖縄県> 沖縄県立八重山高等学校 教諭 比嘉 小百理
「“心からの笑顔”でつなげる

八重山高校郷土芸能部の取り組み」

<北海道> 北照高等学校 教諭 号刀 悠貴
「高校生がワイン造り！？変わりゆく学校」

<宮崎県> 一般社団法人こゆ地域づくり
推進機構 教育イノベーション推進専門官 中山 隆
「学校の外だからできる『つなげる教育』
-教育旅行という選択肢-」

第3部 ラウンドテーブル



申込〆切 11月5日(土)

応募多数の場合 締め切らせていただくことがあります

QRコードからお申込みください <https://forms.gle/rPTicYBSKHeafQTE8>

問合せ dpdt.fktk@gmail.com

<主催>

福井大学連合教職大学院東京サテライト

<後援>

東京都板橋区教育委員会

現在、複雑化する社会・世界を生きていく子どもたちの幸せ～Well-Being～の実現のためにさまざまな施策や取組が全国で展開されています。

本ラウンドテーブルでは、“つながり”をキーワードとして私たちの教育を見つめ直し、直面している課題をお互いに打ち明け、省察しながら、したいこと・すべきこと・できることについて共に学び合ひましょう。



第1部

9:30	接続開始
10:00～10:10	オープニング挨拶 柳澤 昌一 (福井大学連合教職大学院総合教職開発本部 副本部長)
10:15～11:15	講演会 荒瀬 克己
11:15～11:45	質疑応答
11:45～12:00	事務連絡
12:00～13:00	休憩

第2部

13:00～14:15	実践発表
14:15～14:30	休憩

探究を通して、学びはどのように育まれていくのでしょうか。教師間・学校間のつながり、子どもたちと教師のつながり、学校と社会とのつながりなどを実直に探究されている方々から、実践・子どもたちの変容・課題を発表していただきます。



第3部

14:30～16:00	ラウンドテーブル
16:00～16:20	シェアリング～終了
16:20～16:30	挨拶

「ラウンドテーブル」とは、小グループ（4名程度）で、立場等の違いを超え、自身の実践の省察と他者の実践の傾聴という交流の中で新たな可能性を探る営みです。今回は、子どもたちの学びを支える教師の探究などについて語り合い、わくわくする未来への第一歩を一緒に踏み出しましょう。



関係各位

令和4年9月吉日

坂井市立丸岡南中学校
校長 黒川 光憲

令和4年度
坂井市立丸岡南中学校（福井大学教職大学院拠点校）
自主研究発表会のご案内

研究主題

共に学び合い、高め合う学校文化の創造
～新しい学びのかたちを求めて～

仲秋の候、皆さまにおかれましてはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。
日ごろは本校の教育活動に深いご理解と温かいご支援をいただき、心から感謝申し上げます。

さて、本校は平成18年度開校以来、福井県初の教科センター方式の学校として、教科の壁を越えた教職員の協働による自主研究に取り組んでおります。本年度は研究主題「共に学び合い、高め合う学校文化の創造～新しい学びのかたちを求めて～」のもと、主体的・対話的で深い学びのある授業やタブレット端末を効果的に使った活動などについて研究・実践を推進しているところでございます。

つきましては、下記の要項にて自主研究発表会を開催し、校種、教科に関わらず、多くの方々にご参加いただき、皆様からのご指導、ご高評を今後の研究に生かしてまいります。

是非ご来校いただき、本校の取組をご覧くださいますよう、ご案内申し上げます。

1 期 日 令和4年11月16日（水）

2 会 場 坂井市立丸岡南中学校

〒910-0355

福井県坂井市丸岡町高瀬15-2

ホームページ：<http://www.maruokaminami-j.ed.jp/>

3 日 程

13:00	13:30	13:55	14:10	15:00	15:20	16:10
受付	全体会	休憩	公開授業	移動	授業研究会	



4 公開授業 14:10～15:00

教 科	学年・組	単 元 [題 材]	授 業 者
社 会	1 年 4 組	アジア州	鈴木 清史 教 諭
英 語	1 年 3 組	Grammar for Communication 5 代名詞	山田 充 教 諭
家 庭	1 年 2 組	これからの家族と地域	高木 真由美 教 諭

5 授業研究会 15:20～16:10

公開授業の教科ごとに授業研究会を開催いたします。参加される皆様からのご意見をいただきたいので、授業研究会に参加される場合は、その教科の公開授業の参観をお願いいたします。

6 指導助言

○助言者

坂井市教育委員会	永 田 賀 保 人	指導主事
坂井市教育委員会	寺 澄 澄 人	指導主事
あわら市教育委員会	水 崎 隆 亮	指導主事

○協働研究者 福井大学連合教職大学院

松 田 通 彦	客員教授	小 林 真由美	教授
高 阪 将 人	准教授	河 合 恭 江	非常勤講師
浦 井 寿 尚	非常勤講師		

7 参加申し込みについて

- 下のURLや右のQRコードから、必要事項をご記入の上、お申し込みください。

URL <https://forms.gle/UNzGAChrS4UaZ2hw9>

- 申込締切日 令和4年11月9日（水）



本件担当

坂井市立丸岡南中学校

tel 0776-67-7722

fax 0776-67-7122

e-mail: info@maruokaminami-j.ed.jp

研究主任 上村

各 位

令和4年7月19日

福井市安居中学校
校長 高橋 和代令和4年度 福井市安居中学校 創立10周年記念
公開研究会の一次案内

研究主題

Agencyを育む学び
～「共に創る」とは～

盛夏の候、皆様におかれましてはますます御清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、本校は「全校一体型教科センター方式」を活用し、志を持って、挑戦し続ける生徒の育成をめざして実践を重ね、「独立分離移転 創立10周年」を迎えることができました。

つきましては、下記のとおり創立10周年記念の公開研究会を開催します。日常的な生徒の学びの姿をご覧いただき、皆様からの御指導・御助言を賜ることで、今後の取組に生かしてまいりたいと考えております。ぜひとも御参加いただきますよう案内申し上げます。

記

1 期 日 令和4年11月25日(金)

2 会 場 福井市安居中学校
〒918-8076 福井県福井市本堂町12-4 TEL (0776)37-0155

3 日 程

10:20	10:40	12:10	13:15
受付	ポスターセッション 「My Learning」 (90分) 【体育館】	昼食・休憩 ※ 昼食は、各自で御準備願います。 控室【Kラボ・Sラボ教室】	
13:00	13:15	14:05	14:20
受付	公開授業 社会 (50分) 【社会教室】	休憩・移動	創立10周年記念式典 シンポジウム 『共に創る』未来の安居中学校 シンポジスト 生徒・教員・公民館長 アドバイザー 独立行政法人教職員支援機構 理事長 荒瀬 克己 氏 コーディネーター 校長 (70分) 【体育館】
		休憩・移動	授業研究会 研究会Ⅰ(15分) 研究会Ⅱ(30分) ※研究会Ⅰは生徒も 参加します。 【学びのひろば】
			15:30 15:40 16:25

* 本校は福井大学連合教職大学院拠点校となっています。本公開研究会は、福井市中学校
教育研究協議会の提案授業・福井市指導主事学校訪問と兼ねております。

〔令和3年11月26日に行われた「My Learning」の様子〕

問い合わせ先
福井市安居中学校
教 頭：伊藤良知 研究主任：竹内恭平TEL : 0776-37-0155 FAX : 0776-37-0100
E-mail : ago-j@fukui-city.ed.jp
ホームページ : <http://www.fukui-city.ed.jp/ago-j/>

(1) ポスターセッション「My Learning」 (10:45~12:15)

「異学年で日々の学びを語り、深める」という本校の特色ある取組です。総合的な学習の時間や特別活動、そして教科での学びについて、全生徒が語り手となり、ポスターセッションを行います。また、「共に創る」学校文化を醸成するために、教職員や保護者、地域の方も聞き手に加わり、ポスターセッションでの学びを深めます。

(2) 公開授業 (13:15~14:05)

教科	学級	授業者
社会	2年1組	伊部 雅之

(3) 創立10周年記念式典・シンポジウム (14:20~15:30)

10周年を迎え、学校だけでなく、地域の方もいっしょに「共に創る」学校を目指し、議論を重ねています。当日は、教師や生徒、地域の代表としての安居公民館長をシンポジストとして、荒瀬克己氏をスーパーアドバイザーとしてお迎えし、『共に創る』未来の安居中学校」をテーマにシンポジウムを行います。

(4) 授業研究会Ⅰ・Ⅱ (15:40~16:25)

研究会Ⅰでは生徒も参加し、生徒が何を学び、授業とどう向き合っていたのかを語り合います。研究会Ⅱでは、研究会Ⅰの内容を踏まえ、授業を生徒と教師が共に創ることについての研究会を、教師のみが参加する形で行います。



4 参加申込

左のQRコードまたはURLにアクセスしていただき、必要事項をフォーム内の記入例のように入力ください。
令和4年10月24日(月)までにお申し込みください。

URL <https://onl.bz/EeTMhNr>

午後のみの参加でも結構です。



5 その他

- ・自家用車でお越しの際は、本校敷地内の駐車場を御利用ください。
- ・当日は、「来校者健康チェックカード」の提出・マスク着用にご協力ください。
- ・玄関での密を避けるために、できれば「来校者健康チェックカード」を本校ホームページよりダウンロードし、必要事項を記入したものをお持ちください。



※JR福井駅からは、タクシーの利用が便利です。(約1.8km 約2.2分)



奈良女子大学附属幼稚園



オンライン型研修 ご案内

実践記録を土台に実践をじっくり語り合います。

その時々感じていたこと、振り返る中で見えてきた繋がり、

経験をくぐった自分の言葉で改めて語り対話することで

自分自身の無自覚だった実践知を言葉にしたり、多様な考えに触れたりすることで、

保育の専門性をともに高めるコミュニティに参加しませんか？

省察を軸とした園内研修の方法も一緒に考えていきましょう！

1. 研修日（令和4年度）

8月2日（火）

12月17日（土）

2. スケジュール

9:45～	接続開始
10:00～	趣旨説明
10:10～	事例報告 セッション
12:30	終了予定

準備物

- ・オンライン 会議システム「ZOOM」をインストールしたパソコン(PCマイク・スピーカー・カメラが付いていない場合はご用意ください)
- * ZOOMの使用方法は事前に一緒に確認しますので、遠慮なくお尋ねください。

3. 対象者

現職のこども園、保育園、幼稚園、小学校の教諭または保育士
□その他、ご興味のある方はお問い合わせください。

4. 費用 無料

5. 申し込み方法

研修日2週間前までに、下記についてご記入いただき、FAX またはメールで申し込んでください。
後日、ご連絡させていただきます。

件名「オンライン研修 申し込み」- 所属・氏名・電話番号・メールアドレス をご記入ください

◆お問い合わせ◆



奈良女子大学附属幼稚園

Kindergarten Attached to Nara Women's University

〒631-0036 奈良市学園北1丁目14-1

<http://www.nara-wu.ac.jp/kindergarten/>

TEL. 0742-45-7261 FAX. 0742-40-2161

Mail: fuyo-admin@cc.nara-wu.ac.jp

後援(申請中): 奈良県教育委員会 奈良市 奈良市教育委員会

奈良国立大学機構連携教育開発センター

奈良女子大学教育システム研究開発センター

福井大学教育学部附属特別支援学校

令和4年度 公開研究会 (一次案内)

研究テーマ

「一人一人の学びが深まる
カリキュラム・マネジメント」
(4年計画2年次)

サブテーマ

「活動がつながり 学びが広がる 生活をつくる」

令和5年1月27日(金) 午後

子ども主体の生活をつくっていくために、教師は子どもの学びのストーリーをどのように子どもと共に展開していったのか、また、子どもの学びを支え続けるために、どのようなカリキュラム・マネジメントが必要なのかを研究しています。

2年次の本年度は、各学部の活動づくりと事例研究をすすめながら、各学部間のつながりについても協議してきました。

オンラインでの公開研究会を通して、私たちの気付きや迷いについて皆様と意見交換をすることで、研究をさらに深めたいと考えています。御参加お待ちしております。

○公開授業の事前配信を予定しています。



小学部「のびのびタイム」



中学部「ゆうゆうタイム」



高等部「仕事」

○研究概要報告・協議 ビデオ会議アプリ ZOOM にて

「(仮) 子どもの学びが広がっていく生活をどのようにデザインし支えるか」

※参加費：無料

※詳細は11月下旬に二次案内及び本校ホームページにてお知らせします。

福井大学教育学部附属特別支援学校

〒910-0065 福井県福井市八ツ島町1字3番地

TEL 0776-22-6781 FAX 0776-22-6776

URL <http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~f-tokusi/>

令和4年度 ふくい教育フォーラム 開催要項

※昨年度までの「教育研究発表会」を改称し、研究所員の研究以外にも先進的な取組を幅広く発表していただくフォーラムとして開催します。

- 1 目 的 福井県内の先進的な取組事例を全国に向けて発信し、交流の場とする。
- 2 テ ー マ 「教育DXで拓く福井の未来」
- 3 開催日程 令和5年3月7日（火）～9日（木）
- 4 開催方法 ハイブリッド開催（現地会場＋zoom 配信）
- 5 主 催 福井県教育総合研究所
- 6 対 象 福井県内外の教職員・教育関係者
- 7 発表内容と日程

令和5年3月7日（火）・8日（水）※zoom 開催

13:30～13:35 所長挨拶、諸連絡
 13:35～14:55 発表3本＋意見交流
 14:55～15:10 休憩
 15:10～16:30 発表3本＋意見交流
 16:30～16:35 諸連絡

3月9日（木）※ハイブリッド開催

10:00～10:05 所長挨拶、諸連絡
 10:05～11:10 発表2本＋意見交流
 11:10～11:20 休憩
 11:20～12:25 発表2本＋意見交流
 12:25～14:00 休憩
 14:00～14:10 諸連絡、講師紹介
 14:10～14:50 シンポジウム（講師×教育DX推進者×発表者）
 14:50～15:00 休憩
 15:00～16:10 総括講演「今、教育DXに必要なこと（仮題）」
 講師 情報通信総合研究所特別研究員 平井聡一郎氏
 16:10～16:25 質疑応答
 16:25～16:30 諸連絡

- 8 発表者 16組（一般公募および教育総合研究所所員）
- 9 発表者募集
 - （1）募集人数、対象、発表内容、発表形態等については、別紙募集要項・ポスターを参照
 - （2）申込は募集要項・チラシのGoogleフォーム・URLおよびHPのリンクから
- 10 今後のスケジュール
 - 10月4日（火）開催要項・発表者募集要項・チラシ発送（メール送付）
 - 11月18日（金）発表者募集締切
 - 12月5日（月）開催要項・参加者募集要項・パンフレット発送（メール送付）
 - 2月17日（金）参加者募集締切

【お問合せ先】

教科研究センター 村上
 電話：0776-58-2170（直通）
 E-mail：m-murakami-2o@ma.fukui-ed.jp

福井大学連合教職大学院 入試説明会

令和4年

※オンラインにより開催します。

12/25 日 13:00-

教職開発専攻

授業研究・教職専門性開発コース
ミドルリーダー養成コース
学校改革マネジメントコース

●オンライン（Zoom利用）

●新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、オンラインによる実施となります。

学生募集日程

令和5年度 第1回募集

出願期間：令和5年1月18日(水)～24日(火)
試験日：令和5年2月4日(土)
合格発表：令和5年2月13日(月)

令和5年度 第2回募集

出願期間：令和5年2月15日(水)～21日(火)
試験日：令和5年3月4日(土)
合格発表：令和5年3月13日(月)

過去問を
入手できま
す。

募集要項を
入手できま
す！

出願を考えている方、関心のある
方は、お気軽にご参加ください。

※参加希望の方は、必ず事前にEメールで入試課
に連絡(氏名、住所(資料送付先)、電話番号、
所属、志望コース)してください。後日zoomの
URLとパスワードをお送りいたします。

教員免許取得プログラム

(推薦選抜を除く)

授業研究・教職専門性開発コースの入学者で、教
職に対して強い意欲を持った者に、小学校、中学校、
高等学校(取得出来ない免許もあります。)又は特
別支援学校の教育免許取得の道を拓くものです。

授業料は、通常の2年分の授業料を3年間で分割
納入することになります。

福井大学学務部入試課

電話番号 → 0776-27-9927

入試課メール → g-nyusi@ad.u-fukui.ac.jp

格致によりて 人と社会の未来を拓く



国立大学法人

福井大学
UNIVERSITY OF FUKUI

福井大学大学院・連合教職大学院 〒910-8507福井県福井市文京3-9-1 TEL.0776-23-0500 (代表)

Schedule

10/22 Sat. 月間合同カンファレンス(10月)A日程、**10/29 Sat.** 同 B日程

11/19 Sat. 月間合同カンファレンス(11月)A日程、**11/26 Sat.** 同 B日程

12/24, 25, 26 Sat. Sun. Mon. 冬期集中講座サイクル A日程、**2023/1/5, 6, 7 Thu. Fri. Sat.** 同 B日程

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【編集後記】久しぶりのニュースレターの発行となりましたが、その間には夏の集中講座や宮古島ラウンドテーブル、NITS 研修講座など様々な取組があり、それぞれの暑い夏を過ごしてきました。気が付くとすっかり秋の気配となりましたが、この学びを深まりゆく季節とともに、自分の中にしっかりと刻んでいき、2022 年の後半につないでいきたいですね。(M)

教職大学院 Newsletter No.163

2022.11.2 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp